



「日本文化創出を考える」研究会
2020 年度報告書

公益財団法人国際高等研究所

「日本文化創出を考える」研究会

「日本文化創出を考える」研究会

2020 年度報告書

目次

| | |
|-------------------------------------|----|
| はじめに：新型コロナ禍と日本文化創出 | 1 |
| 第一章 人類の永続性と文化の意義 | 2 |
| 1. 新型コロナと終末 | 2 |
| 2. 終末論 | 3 |
| 3. 地球温暖化 | 4 |
| 4. グローバル化と都市化は何をもたらしたか | 4 |
| 5. 対策はあるか | 5 |
| 6. コロナ禍と新自由主義経済 | 6 |
| 7. データイズム：人間が人間でなくなる社会 | 6 |
| 第二章 新型コロナウイルス禍への対応 | 8 |
| 1. COVID-19 に対するサイエンスと宗教の立ち位置 | 8 |
| 2. 新型コロナ禍における仏教の現状と対応 | 9 |
| (ア) 寺院存続の危機 | 9 |
| (イ) 寺請制度による寺院数の増加 | 10 |
| (ウ) 葬式仏教とお墓 | 10 |
| (エ) 寺院の主たる収入源 | 11 |
| (オ) 寺院衰退を防ぐための取り組み | 11 |
| (カ) 新型コロナ禍における寺院の取り組み | 12 |
| (キ) 仏教寺院の未来 | 12 |
| 3. COVID-19 対応を巡る文化や生活習慣の影響 | 13 |
| 4. 公共と個人 | 14 |

| | | |
|-----|--|----|
| 5. | 家族とコミュニティ | 15 |
| 第三章 | 世代を超えた文化の継承 | 16 |
| 1. | COVID-19 による分断がもたらした危機感と気づき：「人間の死」の時代の音楽文化 | 16 |
| 2. | 人類の知恵：世代を超えて継承すべき文化遺産..... | 16 |
| | (ア) 文化継承の現状把握..... | 16 |
| | (イ) 万博と文化継承..... | 18 |
| 第四章 | ニューノーマル時代の新たな文化創出 | 19 |
| 1. | 第三のニューノーマル時代 | 19 |
| 2. | インターネット経由で形成される新しい音楽コミュニティ..... | 20 |
| | (ア) 新型コロナ禍における音楽産業の対応..... | 20 |
| | (イ) ユーチューブやTikTok から音楽界のスターに..... | 20 |
| | (ウ) 既存クラシック音楽の未来..... | 21 |
| 3. | 音楽のオンライン教育..... | 22 |
| 4. | オンライン上での新たな文化創出..... | 23 |
| 第五章 | 世界に発信する日本の文化力..... | 25 |
| 1. | 受容→模倣→変容→成熟を経て創造されてきた日本文化 | 25 |
| 2. | 絵画の変遷にみる日本文化の特質..... | 27 |
| 3. | 人間と自然：二元論の西欧と一元論の日本 | 28 |
| 4. | 文化力による自己の価値化と新たな幸福感..... | 30 |
| 付録 | 世界に発信する日本の文化力 | 32 |
| | 研究会開催経過 | 47 |
| | 研究会メンバー | 48 |

はじめに：新型コロナ禍と日本文化創出

新型コロナウイルス感染症（国際正式名称：COVID-19）が地球規模で蔓延し、人類の脅威となるパンデミックに陥ってから、既に1年余りが経過した。世界の社会経済活動が質量ともにこれほど長期にわたって同時停滞した結果、平時に比べてラジカル・イノベーション「創造的破壊」がはるかに加速される環境が発生したと想定される。現時点では未だ顕在化していない、あるいは帰趨の定まらないイノベーションの結晶核が COVID-19 終息後の社会で大きな結晶に成長し、新しい形式の常態（ニューノーマル）へパラダイムシフトさせる可能性が大である。さらに長期的視点に立てば、新しい文化が芽生える契機にもなり得て、この期間を経ることにより新たな日本文化の創出につながるであろう。これが COVID-19 終息後に来たるべきニューノーマル社会の実相である。

あらゆる様式の間活動に制約を及ぼしている COVID-19 のパンデミックに伴う社会経済活動の長期停滞を経験するなか、昨年度まとめた「日本文化創出を考える」研究会 2019 年度報告書の第一章「目指すべき文化創造都市のイメージ」において、けいはんな学研都市の近未来に実現するであろうと展望した活動形態の多くが国内外のいたるところで既に社会実装されつつある。常態（ノーマルな状態）で推移していたなら、これほど加速されなかったはずであり、好むと好まざるに拘わらず、COVID-19 のパンデミックという外的要因がパラダイムシフトを促しつつある。

このような地球社会を取り巻く現在の非常態（アブノーマル）環境に着目し、2020 年度の研究

会では、日本文化およびその創出に及ぼす COVID-19 パンデミックの影響について多面的に議論した。

本報告書に記載されている新型コロナウイルスに関連した用語は、特に断らない限り、下記の意味である。

新型コロナウイルス：2019 年末に初症例が確認されて以来、世界規模での感染拡大によるパンデミックをもたらした新型のウイルス。インフルエンザに似たコロナウイルス症状であるが、2002 年後半から 2003 年に世界で流行し、より重度な重症急性呼吸器症候群（SARS）を引き起こした SARS ウイルス（SARS-CoV）と同類であることから **SARS-CoV-2** と名付けられた。

新型コロナウイルス感染症：新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）によって引き起こされる急性呼吸器疾患で、重症化する症例が多い感染症。正式名称は **COVID-19**。

コロナ禍：新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）がもたらした人類の危機。

コロナ・パンデミック：新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）による感染症（伝染病）の世界的大流行。

（西本 清一）

第一章 人類の永続性と文化の意義

新型コロナと「人間の終わり」

-今日、文化にはいかなる役割が与えられているか-

1. 新型コロナと終末

新型コロナ禍は世界大戦の厄災に匹敵するような危機である。世界中のあちこちで町が封鎖され、さながらこの世の終わりを暗示しているかのようである。

2020～2021年、世界中を新型コロナの嵐が吹き荒れた。2021年2月22日、アメリカ国内における新型コロナウイルス感染症死者数が累計で50万人を超えた。これは、第一次世界大戦、第二次大戦、ベトナム戦争のアメリカ人合計死者数を上回る。今日のわれわれが未曾有の災厄と危機のなかに生きていることは、ここからも明らかである。



図 1.1.1 <https://www.afpbb.com/articles/-/3273354?pid=22188905> (2020年3月13日撮影) (c) Andreas SOLARO / AFP

感染防止のため、世界のあちこちで町が封鎖され、人気なくなった。写真は、新型コロナ禍のローマのスペイン階段である。ふだんは大変な人込みだが、そこに人の姿が見えなくなった。人気のない寒々としたローマの町を人が一人だけ歩いている。まことに不気味な光景である。

この光景は映画『戦場のピアニスト』の一場面を思い起こさせる。ピアニストのシュピルマンはワルシャワのある家の屋根裏に隠れていた。やが

てドイツ軍が撤退し、シュピルマンはワルシャワの町に出る。町は廃墟と化している。人の姿は一人も見えない。まるでこの世の終わりが来たかのようだ。監督のロマン・ポランスキーはこの場面を明らかに世界の終末として描いた。映画中のそんな戦慄するような場面が、今回はイタリアのローマで現実の情景と化している。それを思えば、誰しも息を呑まざるをえない。



図 1.1.2

<https://livedoor.blogimg.jp/merrow24/imgs/9/7/97c7ea7a-s.jpg>

『戦場のピアニスト』は、ポーランド人シュピルマン (1911-2000) の実体験記を映画化した作品である。この映画を監督したロマン・ポランスキー一家は第二次大戦中、クラクフのユダヤ人ゲットーに強制移住させられた。両親は強制収容所に送られ、母親はアウシュヴィッツで殺されたが、ロマン自身は父親の助けでゲットーを辛くも脱出し生き延びることができた。ある日、彼はシュピルマンの原作 (『ある都市の死』) を読み、そこにかつての自分自身の姿を見だし、これを映画化した。そのとき彼は、廃墟と化したワルシャワのむごたらしい映像に執拗にこだわった。

この映像をポランスキーは内戦のあったコソボで撮り、「人間」のなくなった凄惨な廃墟の姿を現出させようとした。ポランスキーは、この廃

墟の映像で 1945 年のワルシャワの惨状を示すと同時に、明らかにこの世の終わりを暗示している。この映画は、ナチズム批判の映画であると同時に、ポランスキー監督の終末観を如実に示している。「人間」が消えた廃墟の映像のなかに主人公が弾

くショパンの「バラード」第一番が響く。まるでこんな時代に人を救うのは音楽という文化だけであるというかのように。

(高橋 義人)

2. 終末論

人類の歴史は戦争とパンデミックの反復であり、新型コロナ禍は地球環境悪化の一コマである。

終末論はもともとユダヤ教、キリスト教、グノーシスに共通した思想で、ユダヤ教の黙示文学やキリスト教の千年王国論には世界の終末時における救済への願望が熱く語られている。そんな終末論は古代や中世における被抑圧民族の怨念と捉えられがちだったが、その終末論が 19 世紀から 20 世紀への世紀転換期に息を吹き返した。それは、産業革命が進行するとともに、人間の価値が大きく低下したことと決して無縁ではない。ディケンズの『オリバー・ツイスト』(1838 年)やゾラの『ジェルミナル』(1885 年)に描かれたように、労働者が悲惨な生活を送る時代にボードレーは進歩史観を否定し、終末のイメージを詩的に描いた。同じく文明の進歩に対して懐疑的だったポール・ヴァレリーや T・S・エリオットは、ヨーロッパ精神が危機に瀕していることを強く訴えた。そうした危機感を共有していた人々は数多く、そのためシュペングラーの『西洋の没落』(1922 年)がベストセラーとなった。A・ハクスリーが『すばらしい新世界』(1934 年)で、G・オーウェルが『1984 年』(1949)でディストピアを描いたのも、そうした背景があったからだった。

多くの人々が危機への対処の必要性を説いていたにもかかわらず、「西洋の没落」はナチズム、スターリニズム、アウシュヴィッツ、ヒロシマによって著しく加速された。

第二次大戦後に歴史は冷戦時代を迎え、核戦争の危機が現実味を帯びてきた。小説『渚にて』(1957)とその映画化(1959)には、核戦争による世界の終末が描かれている。

その後には起きたのは、地球環境の汚染問題だった。レイチェル・カーソンは『沈黙の春』(1962 年)において農薬がもたらす生態系への悪影響を問題にし、森から鳥がいなくなった春の不気味な虚無を文学的な筆致で描いた。

世界はまもなく終わる。こうした切迫した危機感をやがて若い世代も抱くようになった。日本でその証左となったのがアニメ『新世紀エヴァンゲリオン』(1995-1996 年)の爆発的ヒットだった。

そして今回の新型コロナ・パンデミックである。新型コロナウイルスの世界での死者数は 2021 年 2 月 26 日現在で 250 万人を超えている。毎日 1 万 2000 人近くが死んでいることになる。世界大戦時に匹敵する憂慮すべき事態である。

かつて多くの人々が、戦争が終わり平和が早く訪れることを願っていたように、今回のコロナ禍の一日も早い終息を待ち望む人は多い。たしかにコロナ禍はいつか収まるだろう。だが 19 世紀以降、産業革命や「文明の進歩」と引き換えに人間の生活状態はどんどん悪化していった。人類の歴史はオリンピックと万博の反復であるのみならず、戦争とパンデミックの反復でもある。それを思えば、コロナ禍の後には別のパンデミックが起こると考えるべきであり、今回の新型コロナ禍は一連の地球環境悪化の一コマと見なされなければならない。終末は刻々と近づいてきているのだ。

(高橋 義人)

3. 地球温暖化

地球温暖化のほうが新型コロナよりもはるかに恐ろしい。SDGs では不十分なのではないだろうか。

新型コロナよりも恐ろしいのは、地球温暖化である。ところが真夏の気温が40度を超えても、今のところ、死者数は限定的で、コロナ感染症ほど多くはない。そのため、多くの人々が地球温暖化を仕方がないことと捉え、半ば諦めてしまっている。しかしやがて死者数は爆発的に増えるだろう。そしてそのとき対策を講じて、きっともう間に合わないだろう。

スウェーデンの女子高校生で環境問題の活動家であるグレタ・トゥーンベリは、国連でこうスピーチした。

多くの人たちが苦しんでいます。多くの人たちが死んでいます。全ての生態系が破壊されています。私たちは大量絶滅の始まりにいます。それなのにあなたたちが話しているのは、お金のことと、経済発展がいつまでも続くというおとぎ話ばかり。恥ずかしくないのでしょうか！

https://www.huffingtonpost.jp/entry/greta-thunberg-un-speech_jp_5d8959e6e4b0938b5932fcb6

彼女はまた、「地球温暖化については30年以上も前から科学で明らかだったのに、なぜ背を向けてきたのか」と問うている。あなたたち大人はいったい何をしてきたのか、と詰問しているのである。彼女の問いに対して、自分は真面目に努力してきたと答えられる大人は少ないだろう。

グレタ・トゥーンベリによれば、われわれ大人は経済成長のことしか考えていない。彼女の眼にはSDGsではすでに不十分である。経済成長のことばかり考えている大人たちのために考え出されたのがSDGsである。これは、今は大変な時代だから、明日からおかずを一品減らしましょうと言っているようなものだ。だが、一品減らしただけでは、もうどうにもならないのではないかと。

『サピエンス全史』と『ホモ・デウス』で一躍有名になったユヴァル・ノア・ハラリはNHKのインタビューで、人類は全面戦争によってではなく、地球温暖化によって予想より早く終わるかもしれない、早ければ2050年頃までに終わるかもしれない、と答えている。地球温暖化のほうが新型コロナよりもはるかに恐ろしいのである。

(高橋 義人)

4. グローバル化と都市化は何をもたらしたか

都市化、自然破壊、グローバル化が新型コロナウイルス感染拡大の原因となっている。つまり新型コロナウイルスの感染拡大は人類への警告でもある。

新型コロナウイルス感染拡大の原因はおそらく次の2点に求められる。

1) 大量生産・大量消費にともなう都市化・自然破壊

2) グローバル化にともなう交流増大と外国人観光客の急増

日本はドイツとほぼ同じ国土面積を有しながらも、山地が多く、人が住める土地は限られている。そのため日本には大都市が多く、われわれは

大都市特有の過密な居住空間、貧困、満員電車に耐えながら生活している。そしてこれらは、ウイルスの空気感染に対してきわめて脆弱である。

新型コロナウイルスの発生源は中国雲南省のキクガシラコウモリであると言われる。それまで新型コロナウイルスは森林や洞窟の中で生息するコウモリのあいだで感染し穏やかに種を維持してきた。一部の推測によれば、そのコウモリを希少動物であるセンザンコウが食べ、そのセンザンコウが密猟されて人の口に入り、新型コロナウイルスは人に感染した。自然界のアンタッチャブルな領域を侵食したことによってパンデミックは起きた。

同様のことが、鳥インフルエンザ、エボラ出血熱、SARS、MERSにも認められる。これらにはみな、

パンデミックを惹き起こすおそれがある。もしかすると今回の新型コロナは、今後次々と襲ってくる一連のパンデミックの先触れなのかもしれない。もしかしたらそれは、これ以上グローバル化

するな、都市化するな、自然を侵すな、というわれわれ人類に対する警告なのではあるまいか。
(高橋 義人)

5. 対策はあるか

学者の使命は、危機の時代となった現代に病の処方箋を与えることにある。新型コロナの時代に、人間が人間らしい生活を営むのに不可欠な「社会的共通資本」をどうすべきかは、学者に与えられた大きな課題である。

かりに今回の新型コロナ禍を経験していたなら、かならずや重要な提言をされていたらと思う人が二人いる。

一人は、京都大学第 19 代総長で国際高等研究所初代所長だった岡本道雄氏である。彼は、現代は危機の時代である、そんな時代に病の処方箋を与えるのが学者の使命である、なのにその使命感を持たない学者が多すぎる、今の大学教授の多くはサラリーマン学者と化している、と嘆かされていた。今回のコロナ禍の対策でむろん医学部の人たちは多忙をきわめているが、それ以外の大学人の多くは、新型コロナの対策で授業がオンラインになり、その対応に追われてはいるものの、今回のコロナ禍に対して自分も貴重な提言をしなければならないという使命感を自覚していない。岡本道雄氏は、そういう大学人たちを厳しく叱咤されたにちがいない。

二人目は、ノーベル賞候補者だった経済学者の宇沢弘文氏である。彼は地球環境問題に対して強い危機感を抱き、空気中の二酸化炭素を減らす方策として炭素税が効果的であると提唱した。税金がかかるとなると、各企業は二酸化炭素を排出しないように努力せざるをえなくなるからである。炭素税はヨーロッパの多くの国々——フィンランド、オランダ、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、ドイツ、イタリア、イギリス——で導入されているが、二酸化炭素排出量の多い国——中国、米国、インド、ロシア、日本——ではまだ導入されていない。これらの国々は金儲けのことばかり考え、環境保全に消極的だからだ。

二酸化炭素が排出される大気は、地球上のすべての生物にとっての共通の財産である。それを国や企業が勝手に汚染させてはならない。同じことが水、森林、河川についても、上下水道、道路、交通機関についても、医療、教育、金融についても言える。これらのものは人間が人間らしい生活を営むためには不可欠のものである。そこで宇沢氏はこれらを「社会的共通資本」と呼び、これらは政府や企業によって恣意的に運営されてはならないと主張した。

『自動車の社会的費用』(岩波新書)で宇沢氏は、「社会的共通資本」のうちの道路を考察している。自動車を走らせるために道路はつくられる。特に高速道路などの自動車専用道路は自動車に乗らない人にはまったく不用である。彼らが支払った税金で自動車専用道路をつくってもいいものだろうか。すでに 1960 年代前半には国会で、受益者負担の原則にもとづいて、道路整備費を自動車の購入価格に上乗せすべきではないかと議論されたことがあった。議論の結果、自動車保有者に自動車税や自動車重量税がかけられることになったものの、大幅な課税は見送られた。むろん自動車産業保護のため、経済優先のためである。

その後、自動車の数は増えつづけ、それとともに自動車事故による死亡者数は著しく増大した。たとえば 2018 年の日本の交通事故死者数は 4595 人であり、これは新型コロナ感染症死亡者数の 3932 人 (2021 年 1 月 9 日厚生労働省調べ) よりも多い。それなのに交通事故死をなぜもっと問題にしないのだろうか。道路整備費も交通事故死の事後処理費も、自動車によってわれわれが支払われている社会的費用だというのに。

自動車は二酸化炭素を大量に排出し、その対策にも社会的費用が支出される。宇沢氏はそうした問題点を鋭く衝いた。もしも宇沢氏がまだ健在であられたら、新型コロナウィルスが空気を汚染し

ていることに対していかなる提言をされたであろうか。宇沢氏亡き後の経済学者に与えられた大

きな課題である。

(高橋 義人)

6. コロナ禍と新自由主義経済

新自由主義社会で自然破壊と環境汚染が進むなか、新型コロナ禍は起こるべくして起きた。まずはSDGsとグリーンエコノミーを推し進めなければならない。

経済優先の政治はサッチャー、レーガン以降の新自由主義によって大幅に推し進められた。新自由主義経済学とは人間の欲望を全的に肯定する経済学、エゴイズムの経済学、哲学・倫理学を欠いた経済学である。1970年代の日本、一億総中流時代の日本で金持ちの家を訪れ、お宅はずいぶんお金持ちですねと言うと、その人は金持ちであることをさも申し訳のないことのように恥じていた。ところが1980年代後半にバブル経済が訪れると、金持ちからは金持ちであることの恥じらいが消え、人間らしさが消え、そして社会の格差が広がっていった。これは新自由主義がもたらした深刻な負の側面である。

新自由主義社会においては都市化によって自

然破壊と環境汚染が進んだ。今回のコロナ禍は、そうした自然破壊と環境汚染の流れのなか、自然軽視の社会風潮がきわまるなかで起こるべきして起きたことである。

グレタ・トゥーンベリは、お金のことばかり、経済発展のことばかり話している現代社会を批判した。コロナ禍に直面したわれわれは、経済優先の政策を早急に停止し、今の経済システムを変革しなければならない。SDGsでは不十分だという人も多いが、とりあえずはSDGsとグリーンエコノミーを推し進めなければならない。

だが、見通しは決して甘くない。トランプ政権下のアメリカでは格差、人種差別、排外主義が広まり、自国ファースト、自分ファーストというエゴイズムが大手をふるってまかり通るようになってしまった。そしてそれをよしとする日本人も少なくない。彼らもまた自国ファースト、自分ファーストなのである。

(高橋 義人)

7. データイズム：人間が人間でなくなる社会

今回のコロナ禍によってデータイズム（データ至上主義）は強まりつつある。しかし大事なものは「人間」であり、その「人間」を守る最後の砦は「文化」しかない。

コロナ禍の拡大を防ぐには、感染者がどこで誰と接触したか、追跡することが必要である。そのため中国と韓国では、政府が国民の情報や位置情報を強制的に収集している。接触者を特定し感染拡大を防ぐのが目的だとされてはいるが、本当は収集した情報を反政府活動抑圧のために使うためではないかという懸念を払拭することはできない。

今回のコロナ禍によってデータイズム（データ

至上主義）は飛躍的に強まりつつある。『ホモ・デウス』のなかで、ユヴァル・ノア・ハラリはこう予測している。コンピューターはますます賢くなり、2045年にはAIが人間の知性を追い抜くだろう、いたるところでロボットが使われ、人間は不要と化していくだろう、と。そのとき明らかに人間の尊厳は失われる。ついに「人間の終わり」が到来する。

すでに囲碁においてアルゴリズムは人間を凌駕し、AIが天才棋士に打ち勝つようになった。まもなくやってくるデータイズム社会では、AIを意のままに動かす一握りの超エリートだけが世界中の富を独占するようになる。データイズムの下、きわめて残酷な格差社会が出現する。少数の超エリートのみが勝ち組に、それ以外の大多数は負け

組になってしまう社会である。

たいていのことはコンピューターやロボットがしてくれるから、国民の大多数が失業する。そうなれば、どうしてもベーシックインカム (BI) が必要になる。AI の時代に人々を支えうるのはBIしかない。

かつて「共産党宣言」の冒頭にマルクスとエンゲルスは、「一人の悪霊がヨーロッパを徘徊している、共産主義という悪霊が。古いヨーロッパの全権力が、この悪霊を祓い清めるために、同盟を結んでいる」と書いた。だが、今日の悪霊はもはや資本主義か共産主義かなどという簡単なものではない。データイズムという悪霊が右と左を問わず、全世界を征服しようとしている。ステージは一変した。この悪霊を追い払うためにわれわれは力を尽くさなければならないが、そうして努力している国は残念ながらひとつもない。

かつて人間は人知の及ばないものを恐れた。神である。神を殺してしまった人間は今や新型コロナをしか恐れない。だが、われわれが神を忘れて

浮かれているうちに、いつしかデータイズムが進行し、その下で人間はいずれ消滅してしまうであろう。

多くの人たちは自覚していないが、じつは今日の人間は、人間の尊厳が失われ、人間が人間でなくなってしまう瀬戸際に置かれている。そういう瀬戸際に人間の非人間化を阻み、「人間」を守る最後の砦はじつは「文化」しかない。だからこそ「文化」は経済優先主義を批判し、データイズムを警戒する。だが、多くの国々の政権は、経済においてもデータイズムにおいても自国が生き残ることを至上命題とするため、自らに批判的な文化や学術をひどく敵視する。だがそれらの政権は、それによって失われてしまうものが、「国家」よりも大事な「人間」であることを完全に失念してしまっている。むしろ彼らに失われたことの責任を取るすべもない。そうと分かったとき、「人間」はすでに消滅し、動いているのはコンピューターだけになってしまっているのだから。

(高橋 義人)

第二章 新型コロナウイルス禍への対応

1. COVID-19 に対するサイエンスと宗教の立ち位置

最先端のサイエンスが COVID-19 の治療法や治療剤の開発に活かされると思われたが、現実には古典的手法による感染防止対策が主流になっている。多様なコミュニティ要因が個人の行動に影響を及ぼすため、宗教・政治指導者の役割が重要になっている。サイエンスを絶対視するのは危険だが、サイエンスを軽視するのはもっと危険である。

ヒトに感染して気道感染症（重症肺炎症）を引き起こす新型コロナウイルス感染症（国際正式名称：COVID-19）の病原体は、2019 年末に発症例が確認されてからわずか 2 ヶ月以内という短期間で、一本鎖プラス鎖 RNA ウイルスであることが突き止められた。これは、2003 年に流行した重症急性呼吸症候群の病原体（SARS コロナウイルス（SARS-CoV））や 2012 年に流行した中東呼吸器症候群の病原体（MERS コロナウイルス（MERS-CoV））と同型である。この結果を受け、WHO（世界保健機構）はこの新型コロナウイルスを SARS-CoV-2 と命名した。SARS-CoV-2 の遺伝子は RNA（リボ核酸）を担体としており、RNA 配列にコードされている遺伝情報は SARS-CoV と約 80%、MERS-CoV と約 50%、さらにコウモリのコロナウイルスとは約 90%類似していることが解明された。これほど迅速に病原体のウイルス特性が解明されたのは、これまでに蓄積された研究成果がいち早く活かされた結果であり、医学や科学技術の歴史的勝利といえよう（平野俊夫：中央公論 7 月号（2020 年 6 月 10 日））。

最先端のサイエンスが解明した SARS-CoV-2 の特性に基づき、感染しやすいヒト（個人）の遺伝的要因や生活習慣、ヒトに感染後の増殖メカニズムが推定可能である。このことから、最適な治療法や治療剤の開発（既存薬剤の再発見を含む）に素早く活かされると思われたが、古典的な手法による感染防止対策に一喜一憂する状態で推移しているのが現状である。現在採用されている感染防止対策を巡っては、各国あるいは地域コミュ

ニティの民族性、信仰する宗教、社会慣習など、広義の社会的・文化的要因、さらには政治経済との関係性に依存して、対策の効果は千差万別である。特にグローバルな視点に立てば、宗教上の教義などに支配される多様なコミュニティ要因が COVID-19 のパンデミックに対する個人の行動に大きな影響力を及ぼしている側面が垣間見られ、政治指導者のみならず、宗教指導者の役割が重要である点を浮き彫りにした。

このような COVID-19 に対して外形的に軽視されていると見えるサイエンスの立ち位置は、東日本大震災（2011 年 3 月 11 日）時の立ち位置と大きな対照を成している。個人差はあったにせよ、東日本大震災は科学の力で予測し、防災が可能であったというのが支配的な世論であった。「想定外の規模の津波が発生した」とコメントしたある専門家は、世論やマスコミから大きな反発と批判を浴びることになった。物理学の現象として、地震と津波の発生メカニズムは本質的にサイエンスの体系から理解可能である。しかし、ひとつの共通観念として合理性に基礎をおくサイエンスは、普遍性の視点で多くの成功を収めたが、必ずしも全能ではないことを理解しておくべきである。東日本大震災に対する防災対策については、想定外の規模に備えてもっと巨大な防波堤を築くことは基本的に可能であったと思われるが、限られた資源（予算）の配分に当たって、他に必要な予算を大幅にカットしてでももっと多くの資金を防波堤や防潮堤の建設に集中投下すべきであったかは議論の余地があるだろう。そのような建設とは別のより合理的な防災対策を講じることも併せて検討し、関係者の間でコンセンサスを得ることが重要である。

現代社会の深層として、西欧社会の近代を拓く端緒となった 17 世紀の科学革命に由来する要素還元論的なサイエンスと、それに原理を求める産業（工業）技術は人間の日常生活に深く浸透し、特に近年は経済との結びつきを強め、宗教に匹敵するほどに人間の心を支配しつつあるのか、と思わずにはいられない。その一方で、現代社会が

COVID-19 に対峙するに当たり、サイエンスの合理性をどうして受け入れられないのか、大きな疑問を抱かざるを得ない場面が多々見られた。

われわれ人間が、サイエンスを絶対視するのは

危険である。反対にサイエンスを軽視するのはもっと危険である。

(西本 清一)

2. 新型コロナ禍における仏教の現状と対応

近年、仏教離れによる仏教寺院存続の危機が叫ばれてきたが、今回のコロナ禍でさらにその危機は高まった。多くの寺院が経営難に苦しんでいたが、今後、多くの寺院が経営破綻し、廃寺が進んでいくであろう。しかし、その流れに立ち向かおうとする流れも一部にはあり、今回のコロナ禍で、わが国においては、存続可能な寺院と、廃寺に向

かう寺院との二極化が更に加速していくものと思われる。

但し、仏教寺院が衰退することと、仏教そのものが衰退することとは必ずしもイコールではない。また、他国の仏教界は日本の仏教界とは異なる動きを取っている点も断っておきたい。本節では、日本の事例に限定して考察したい。

(ア) 寺院存続の危機

お寺の半数は中流階層で、廃寺を検討している住職も多い。日本ではコンビニよりも多くの寺院が存在している。

すでにコロナ禍以前から、わが国の多くの仏教寺院の存続が厳しいことは指摘されてきた。「坊主丸儲け」、「祇園で石を投げれば坊主に当たる」などと言われるように、世間一般では、仏教寺院は経済的に潤っており、僧侶たちはさぞかし奢侈な生活をしていると思われるようである。

「これだけ高額なお布施を請求されるのだから、お寺は贅沢をしているのだろう」と思う人も多いだろう。昨日亡くなった織田無道氏などは、まさにその際たる例で、バブル時代のバラエティー番組で、僧衣をまとってランボルギーニを乗り回す姿は、多くの視聴者たちに「お寺＝金持ち＝贅沢」という印象を植え付けていたように思われる。

しかし、現実には必ずしもそうではない。

『President Online』(2019年9月16日)は、作家で僧侶の鵜飼秀徳氏を取材し、『「4割が年収300万円以下」お寺経営の厳しい現実：2040年までに寺社の3割は消滅する』と題する記事を公開している。2017年の日本全体の平均世帯年収が約550万円であることから考えると、4割ものお寺の家族は、その半分以下で生活をしているということになる。もちろん、住居費が無料というアドバンテージはあるが、個人所得は課税されるため、

支出に関しては一般家庭と大きく変わらない。

すなわち、半分のお寺は「お寺＝金持ち」ではなく、「お寺<中流階層」なのである。ではなぜ、お寺の子は跡を継いで住職になるのか。その多くは、先祖代々からのお寺を潰してはならないという責任感と使命感に基づく。収入面だけで見れば「やりがい搾取」の「ブラック企業」といった状況がそこには存在する。そうした困難な状況において、「自分の代まではお寺を守るが、子にはお寺を継がせない」と、廃寺を検討しているお寺の住職も多い。

特に過疎地域では、多くの寺院が独自の経営ができず、1人の住職が複数の寺院を代務住職として維持しているケースが多い。そうした住職不在の寺院は、地域住民の要望により存続しているものの、多くのお寺で黒字化が見込めないことから、今後、統廃合が進んでいくことは間違いない。

そもそも、現在のわが国の寺院数が多すぎるということ自体も問題かもしれない。全国のコンビニの数は5万5000である。それに対し、寺院は7万7000も存在する。すなわち、コンビニよりもはるかに多くのお寺が存在しているということなのである。多くの方は、コンビニよりも多いお寺の数に驚くであろう。そして思うだろう。「お寺の数はコンビニほどもいない」と。

仏教寺院という特殊な目的の施設が、コンビニという汎用性の高い施設よりも少なくなくて良いと

いう考えは合理的である。しかし、ではなぜ、その特殊な目的を持つはずの施設の数が、コンビニ

よりも多く存在しているのか。

(熊谷 誠慈)

(イ) 寺請制度による寺院数の増加

江戸幕府の寺請制度により、仏教寺院は宗教の場だけでなく、役所としての役割を持つことになった。しかし明治時代には役所的な機能を失い、廃仏毀釈により宗教的権威も失墜し、寺院の必要数は大幅に減った。

その問いに回答するためには、歴史を紐解く必要がある。日本には昔から多くの寺院が存在していたと思われがちであるがそうではない。

例えば、日本の各宗派の中でも最大宗派の1つである浄土真宗の本願寺派（西本願寺）の寺院数は10,129寺（2020年4月1日現在）である。しかし、江戸初期には1,000に満たない寺院数であった。

千葉乗隆（『真宗教団の組織と制度』同朋舎、1978年）によると、江戸時代に入ってから西本願寺の末寺の数が急激に増加していたことが分かる。

- ・天文年間（1532-1555）：259寺
（*本願寺の東西分派前）
- ・元和九年（1623）：1,000寺
- ・元禄七年（1694）：8,337寺
- ・文化三年（1806）：9,699寺
- ・嘉永七年（1854）：10,264寺

特に、江戸前期に寺院数が急激に増えたことが分かる。特に元和九年（1623年）から元禄七年

（1694年）の間に、1,000寺から8,000寺以上にまで寺院数が急増している。江戸中期以降にはむしろ、寺院数に変動は殆どない。この理由はひとえに、江戸幕府の寺請制度にほかならないだろう。

江戸幕府は慶長十七年（1612年）に禁教令を發布し、以後、キリスト教徒たちを改宗させようとした。そうした中で勃発した島原の乱（1637-1638年）で、キリスト教徒の団結力と戦闘力の高さを恐れた江戸幕府は、キリスト教徒の改宗と入信の防護を徹底するようになった。

「踏み絵」などによるキリスト教徒の搜索とともに、民衆がキリスト教徒に入信しないよう管理する役割として、江戸幕府は仏教寺院を利用した。その後、戸籍の管理も、仏教寺院が行うようになった。すなわち、江戸時代から、仏教寺院は宗教活動の場のみならず、役所としての役割を持つようになった。それにより、コンビニ以上の数の寺院が創設されたのである。

すなわち、江戸時代には、キリスト教徒を監視するために「コンビニよりも数の多い」必要性が存在していたのである。しかし、明治に入り、仏教寺院は役所的な機能を失った。さらに廃仏毀釈により、宗教的な権威も失墜していくことになる。その時点で、日本社会における仏教寺院の必要数は大幅に減ったことになる。

(熊谷 誠慈)

(ウ) 葬式仏教とお墓

「葬式仏教」は日本人の精神的通過儀礼において欠かせないものだったが、近年は葬儀そのものの需要が下がった。多くの寺院が「墓」を境内地に有しているが、そのしがらみも減りつつある。

ではなぜ明治期以降に寺院数が減らなかったのか。それには様々な理由が考えられるが、例えば、葬儀と墓の存在は大きな一因であろう。

日本人の宗教観は特殊だと言われる。大晦日の

深夜には仏教の寺院に参って除夜の鐘を突き、夜12時を過ぎて日付が変わると神道の神社に初詣に行く。結婚式には神父や牧師を呼んでイエス・キリストの前で永遠の愛を誓い、人が亡くなるとお坊さんと呼んで仏教式の葬式を行う。

すなわち、「葬式仏教」は日本人の精神的通過儀礼において欠かせないものだったのである。民衆は、葬式を執り行ってもらうために旦那寺との関係性を維持し、日ごろから寄付を続け、寺院を経済的に支援し続けきたのである。葬式の高額なお

布施の負担は大きい、通夜や葬儀は会社関係や近所の人たちとの交流の場でもあり、重要な人たちとの付き合いを維持するためにも、葬儀を拒否する人は稀であった。

しかし、近年、職場や近所との私的な付き合いを控える風潮が起こり、葬儀の規模や必要性に疑問を抱く人が増えるようになった。結果、葬儀の規模が大幅に小さくなり、葬儀そのものの需要も下がり、「葬式仏教」の担い手である仏教寺院への支出額が下がっていった。

しかし、葬儀の社会的な意義と必要性が低下したとしても、仏教寺院との関わりを切ることができないもう一つの理由が存在する。それは「墓」の存在である。墓は本来、仏教文化ではないが、わが国の多くの寺院が境内地に墓地を有する。お

寺との関係を断ち切れれば、当然、墓は撤去しなければならない。しかし「先祖代々のお墓を守らなければならない」という使命感のもと、檀家はお寺との関係を継続してきた。それが、明治以降も寺院数が殆ど減少しなかった大きな理由の1つである。

しかし、近年、僧侶を呼ばない直葬やお別れ会などの形式の葬儀が普及し、また、合同墓や樹木葬など、寺院を介さずに納骨をできる設備が整うにつれ、「葬儀」とともに「墓」のしがらみも減りつつある。それにより、人々のお寺との付き合いも減る。それは、今後、仏教寺院の経営が悪化し、寺院数の減少が加速していくことを意味する。

(熊谷 誠慈)

(エ) 寺院の主たる収入源

寺院の主たる収入源は、葬儀、法要、墓地費用、年会費であるが、今後は大幅に減少すると考えられる。

以上の時代背景から、寺院は、葬儀やお墓による収入が減少していくため、寺院を維持するためには、それ以外の収入を安定させていく必要がある。では寺院の収入源は何なのであろうか。拝観料を主たる収入源とする一部の有名な観光寺院を除いて、寺院の主たる収入源は以下の4つである。

- ①葬儀
- ②年忌法要・月忌法要
- ③墓地の永代使用権の購入費用・永代使用料
- ④年会費（護寺費など）

まず、葬儀については、規模こそ小さくなるも

の、完全に無くなることはないであろう。また、年忌法要（法事）についても、満中陰法要（49日）や一周忌までは、葬儀に準じた法要ということで存続する可能性は高い。しかし、三回忌以降の年忌法要については、減少していくことが予想される。また、月命日の月忌法要（月参り）については大幅に減少していくことが予想される。また、墓地の販売・永代使用料については、合同墓や樹木葬などが増えるにつれて、大幅に減少することが予想される。そうした中、年会費を支払ってまで菩提寺との関係性を維持する必要性がなくなっていくため、年会費収入も大幅に減少していくであろう。

すなわち、既存の寺院の活動による収入は大幅に減少することが予想される。

(熊谷 誠慈)

(オ) 寺院衰退を防ぐための取り組み

文化的な取り組みや、地域コミュニティのハブとして機能を高めるなど、寺院活性化、再生の試みが行われている。

そうした中、こうした寺院衰退の流れを食い止めるため、寺院活性化、再生の試みが行われている。それらの多くは、伝統的な仏事や仏教行事を

強化するというものではなく、より文化的な営みと言える。

お寺でヨガを教えたり、カフェや食堂を営んだり、カルチャースクール的な取り組みがなされるようになってきている。しかし、素人企画ではなかなかうまくいかないということで、「未来の住職塾」や「お寺の未来」といった寺院経営のコンサル

ティングの取り組みが注目されている。そうした経営コンサルタントの指導に基づきお寺の活動を活性化させるとともに経営を見直すという動きも一部には出始めている。

また、檀家にこだわらず地域住民とのコミュニティを強め、地域コミュニティのハブとしての機

能を高めようとする寺院も存在する。

こうした活動の多くは、伝統的な仏事以外の機会を多く提供することで、檀家のお寺への訪問機会を増やし、結びつきを強めようというものである。

(熊谷 誠慈)

(カ) 新型コロナ禍における寺院の取り組み

新型コロナ禍により直接的な対人コミュニケーションが困難になったため、法事の少人数化、短時間化、オンライン化に取り組んでいる。しかしながら、対面型を望む檀家が多く、オンライン化は今回のコロナ禍におけるやむを得ない対応である。

新型コロナ禍以前から行われてきた寺院活性化の取り組みの殆どは、お寺を地域のハブとしたり、檀家と触れ合う機会を増やすなど、「直接的」なお寺との関わりを実感してもらおうというものであった。カルチャーセンターあるいは公民館的な位置づけといえよう。しかしながら、新型コロナウイルスがそうした取り組みをも大きく阻害することになった。直接お寺を訪問することが難しくなり、また、お寺において直接的な対人コミュニケーションを行うことが困難になってしまった。

さらに、法事などの基本業務も、今回のコロナ禍で大きく衰退を余儀なくされた。特に2020年4月からの非常事態宣言下においては、月に200件あった月参りが全て中止となったお寺もあったそうである。法事も勿論中止となり、大都市圏内では、葬儀すら中止となるケースも発生した。非常事態宣言の解除後に、葬儀や年忌法要は再会されたが、不要不急の面会を避けるため、月参りについては再開できていない場合も多い。

すなわち、寺本来の業務も、活性化のための取り組みも、コロナ禍で大きく衰退してしまった。そうした中、新型コロナ対策が行われるようになった。

- ・行事の少人数化
- ・マスクの着用・アクリル板の設置
- ・法事や行事などの短時間化
- ・オンライン化

特に、オンライン化については、オンライン法要、オンライン説法、オンラインカルチャースクールなどが行われ、ソーシャルディスタンスを守った上での業務、活性化の取り組みが進められるようになってきた。とはいっても、オンライン化が進められるのは、オンラインに通じた一部のお寺のみであり、また、スマートフォンやインターネットに慣れていない高齢者にとって、オンライン化に適応していくのは簡単ではない。多くのお寺はコロナ禍の負の影響を受け続けている。

しかも、オンライン化は多くの檀家にとってやむなき対応であり、対面型での行事を望む檀家が多い。学校の授業について、オンライン型よりも対面型を望む傾向と同様である。よって、オンライン化を進めることは、あくまでコロナ禍による業務の激減を避けるために有効な方策に過ぎず、コロナ禍以前の水準に集客を戻すということにはならない。

(熊谷 誠慈)

(キ) 仏教寺院の未来

対面型とオンライン型を合わせたハイブリッド型のサービス提供が今後の仏教寺院の新たな文化となっていく、そのサービスの質と内容が大切である。

以上、コロナ禍以前の仏教寺院の衰退と、コロナ禍による影響と取り組みについて紹介してきた。多くの人にとってはわが国の仏教寺院に未来がないと感じてしまうかもしれない。しかし、それはコロナ禍が永遠に続くということを前提と

した悲観である。今後、質の高いワクチンや抗ウイルス薬が開発され、投与されていけば、対面型での活動が可能になってくるであろう。仏教行事についても以前と同様に、完全対面で実施できる時期が数年後にはやってくる。その際に、これまで対面型オンリーで逃していた、檀家のニーズを、対面型とオンライン型のハイブリッド型サービスの提供により、より多く取り込んでいくことができれば、コロナ禍以前よりも檀家との関係を強く構築することができるのではないかと。

対面型とオンライン型の両方を併せたハイブリッド型のサービス提供。これがポストコロナ時代の仏教寺院の新たな文化となるであろう。

しかし、大切なのは、提供するサービスの質と内容である。肝心の中身がなければ、どれだけ良いコミュニケーション環境を用意しても、人々の

仏教への興味関心が薄れ、仏教離れが進んでいくことは避けられない。寺院本来の業務も、活性化のための取り組みとともに、これまでよりも質の高い内容のものを提供していくことが期待される。そうすれば、更に質の高い寺院文化が形成されていくだろう。

仏教寺院が衰退していけば、仏教文化も衰退していく。その影響は観光寺院にも及んでいき、景色やお庭で有名な観光寺院の破綻ということも生じうる。お花見に、秋の紅葉に行く場所が減ってしまう可能性を考えれば、「仏教徒ではないがお花見や紅葉は大好き」という人にとっても、他人事ではなくなくなってしまうことを覚えておくべきだろう。

(熊谷 誠慈)

3. COVID-19 対応を巡る文化や生活習慣の影響

新型コロナウイルス対策は、世界的な共通性もある一方で、国や集団による違いも浮き彫りになった。北米では社会交流の規制に対するネガティブな感覚が強く、日本では自主的な社会規範の規制が重視されている。

COVID-19 の脅威は世界的規模で発生している。ウイルスがもたらす脅威もさることながら、ウイルスへの対策としての社会的交流への制限、さらにはそれに対する反発、そして行動制限がなされない他者への批判など、多面的に人の行動や感情の本質的側面を示すような事象が世界各地で多発している。その内容には世界的な共通性もある一方で、国や集団による違いも浮き彫りにしている。良くも悪くもいろいろな形でグローバル化と言われ、文化の垣根がなくなると言われていたような環境の中で、実際には文化や習慣等の違いを意識せざるを得なくなったのがこのコロナ禍の状況である。

例えば北米では州や企業などによる対策の厳密さには違いがみられる。個人主義が「自分自身の自由な権利」ととらえられるような場合には移動や社会交流への制限がネガティブに捉えられ、持続的な規制が難しい都市もある一方で、非常に

厳密にオフィスへの立ち入りを制限し、リモートワークを波及させた企業もある。そもそも北米社会では様々な（親しい他者に限らない）他者との社会交流が促進されている文化である。お互いにまだ知り合っていない間もなくとも互いの家に招き合い、相手がどういう人かをまずインフォーマルにも知ることを欲している。多様性が高く流動的な社会においては、こうした交流を介した見極めが互いの信頼関係を構築するための重要なステップとされている。それゆえに社会交流の規制に対するネガティブな感覚も強い。また、「新しく付き合い合う相手を見極める」ステップにおいては、相手の表情を知ることが重要であり、感情的に相手に安心感を与えるためにはっきりと自分の表情を伝えることが価値づけられている。そのため口元を隠してしまうことに関する心理的な抵抗が大きく、マスクでのコミュニケーションがうまく浸透しなかった。そして今の日本では「ウィズコロナ」とか「新型コロナ社会をどう共に生きていくか」という考え方が浸透しているが、北米やヨーロッパの一部では新型コロナに打ち勝つという戦いのモデルで語られる場面がある。こうした北米での傾向はヨーロッパの一部地域でも類似の現象が見られており、社会的抑制の難しさという

問題（反発する人々の暴徒化など）として突き付けられている。

翻って日本では、社会交流はより親密な範囲ならびに仕事の一環としての「付き合い」として発生するケースが多いように思われる。仕事の一環というのは会社で開催されるようないわゆる飲み会である。したがって行動規制がトップダウンでかかると、つまり会社としての食事を禁止するという通達があれば、社会交流への規制がかかりやすい。しかしそれゆえに様々なセクターに効果が及んでしまうことを恐れて、トップダウンの規制をかけることに躊躇する向きもあり、結果として意思決定が遅くなりがちである。その結果と

して、いわゆる「自主規制」としての互いの見張り合いによる抑制が発動し、社会的規範意識としての「自粛警察」「マスク警察」などの用語が散見されるようになってきた。感染することに対してあたかも社会規範を破った証拠であるかのように捉え、きわめて厳しい批判さえもが出されるようになってしまった。こうした日本型の「社会規範重視」というものは、中国や台湾、シンガポールでとられているようなより直接的なトップダウンの介入というものともかなり異なっていることが見て取れる。

（内田 由紀子）

4. 公共と個人

新型コロナ禍への対応によって、社会的な権限を集中して地域や国家を守る公共の立場と、個人の自由を守る立場との間で生じた深刻なジレンマが浮き彫りになった。

「人間のつくり出したもの＝文化」で定義される人間の成立は約 200 万年前のことである。それを起点として現代に続く人間の歴史において、約 199 万年間（時間をものさしとする人間の歴史の 99.5%）が狩猟採集社会であった。道具をつくる手段を手に入れた人類は、やがて野生植物の栽培法（農業）と野生動物の飼育法（牧畜）を発見し（紀元前 7,000 年ごろ）、自給自足の農業社会を形成した。農業技術の進歩とともに余剰の農産物を蓄えるほどになり、農耕に従事しない人口を養う条件が成立した。こうして都市が生まれ、政治を司る統治者（王）、神を司る神官（僧侶）、政治の実務を担う官僚、都市を護る戦士のほか、“ものづくり”を専業とする工人や商いに従事する商人など、階級と職業の分化が進み、都市国家（*civitas*）を構成する市民（*civis*）階級が生まれた（紀元前 3,500 年ごろ以降）。

都市（国家）に住む人々が市民の身分を獲得すること、すなわち都市化（*civilization*）した社会では、都市内における市民の権利が守られる一方、市民の身分に相応しい品位や洗練さが求められ、公共の概念が芽生えた。ここで言う公共の概

念は、都市内で生活することを容認された個々の市民（私）が担うべき公共（私的公共）を指す。

現代は、政治と経済の要請が社会の在り方に過剰な影響を及ぼす困難な時代に直面しており、〈私〉と〈公〉の関係は都市国家で追求された単純明快かつ理想的な構造にはほど遠く、複雑化を超えて混迷化している。日本学術会議の提言「現代における〈私〉と〈公〉、〈個人〉と〈国家〉—新たな公共性の創出」（2010 年 4 月 5 日）は、現状および問題点の冒頭でつぎのように要約した。

「20 世紀は国家の世紀だった。個人は、その生存と権利の保障を国家に求め、国家に委ねてきた。それゆえに、国家の役割はたえず増大してきた。このような国家を中心とする考え方においては、〈私〉に対する〈公〉は、国家と同一視されていた。近代においては、社会のすべての規制権限を集中した国家（主権国家）が形成され、社会のなかの中間団体は解体されて、一方で自由な個人と、他方で権力を独占して個人の自由を保障すべきものとされる国家が向き合う二項構造が生まれた。」

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が世界規模で拡大し、人類の生命を脅かす世界的大流行＝パンデミックに至る過程、さらにはその渦中で、COVID-19 を封じ込めるためのロックダウン措置（外形的には外出自粛や禁止などの全体主義的措置）を巡って国家（国家的公共）と個人の自由

との間で大きな対立が、COVID-19 パンデミックと同様に世界規模で発生し、人類社会の脆弱な構造を露呈するに至った。さらに、民族や国家のアイデンティティーである宗教や文化を信奉する個人の自由意志に基づいた行動様式が COVID-19 の封じ込めを困難にする局面も顕在化している。

これらの現状に認められるように、コロナ禍への対応を巡り、個人の自由を守る立場と地域コミュニティや国家を防衛する立場の間で生じた深刻なジレンマが浮き彫りにされた。

(西本 清一)

5. 家族とコミュニティ

コミュニティの一体感は、集合的な事象に多様な他者が参加することで生じる部分が大きく、今回のコロナ禍でもコミュニティ形成が果たす役割は強くなる。家族は最小の共助単位であるが、コロナ禍で家族の役割が二極化しており、新型コロナによる閉鎖性の問題も検討すべきである。

こういう状況下であるからこそ、コミュニティあるいは自分が所属する「場」の機能が重要になっている。そしてそれは技術によってつながりが助けられていることもあるだろう。典型的に言えばテレワークを可能にしたオンライン会議システムや Wi-Fi 環境の整備などが挙げられる。一方でオンラインでのコミュニケーションはどうしても限定的になってしまう側面がある。一つはインフォーマル・コミュニケーションの難しさである。二次元上で表示されるオンライン会議の画面では、他者の微細な動きや息遣いが伝わってこないため、自分が出した提案に果たして皆が賛成なのか反対なのか決議を取りにくく、結果として無難な意思決定に収まってしまうことがあるだろう。また、会議の前後にちょっと立ち話をする事が無くなってしまい、一体感や同じ意見を持つことなどによる少数派の意見が活かされる機会を逸する可能性がある。本来的にはコミュニティの一体感は、集合的な事象に多様な他者が参加することで生じる部分が大い。お祭りや儀礼的な会議などにも一定程度そうした側面があった。もちろんコロナ禍において不要なものが淘汰

されることもあると思われるが、しかしながら一見不要でも、実はコミュニティの絆形成において機能を果たしていた事柄さえもが捨象されてしまう可能性もある。

社会関係がもたらす影響は「社会関係資本」(ソーシャル・キャピタル)として近年議論されている。個人が持つ社会的ネットワークに限らず、場全体としてお互いの社会交流を促進する環境を提供しているかどうか、ネットワークの中心となっているようなハブとなる人の役割がうまく機能しているかどうかということが、場の幸福を支える上でも重要になっている。ソーシャル・キャピタルはいろいろな支援や情報を得られる源でもあり、かつ「所属意識」を与えてくれる場を提供するものでもある。そして自分が直接つながっていない人(友達の友達)とのつながりによる恩恵を与えてくれるものでもある。コロナ禍においてこそこうしたコミュニティ形成が果たす役割は非常に強くなるはずである。

一方で家族は最小の共助単位であるが、コロナ禍においては家族の役割が二極化している側面もあるだろう。家族がいることによる支えを感じる人たちと、逆に家族の中での閉塞的な空間がもたらす悲劇である。2020年の秋以降、女性の専業主婦層の自殺者が前年度より増加したという統計結果が示していることは、一元的な解釈は難しいものの、家に閉じなければならなくなってしまったことの閉鎖性について検討しなければならない問題を含んでいると思われる。

(内田 由紀子)

第三章 世代を超えた文化の継承

1. COVID-19による分断がもたらした危機感と気づき：「人間の死」の時代の音楽文化

人類が終わりに向かって進んでいる中で、人の心を癒しうるのは文化だけである。文化の中ではみなが兄弟になることができる。ところがコロナ禍はそれを不可能にした。今、われわれからは文化さえもが奪われている。

ニーチェは神は死んだと言い、それを受けてM・フーコーは人間は死んだと言った。いま人類は終わりに向って刻々と歩んでいる。新型コロナはその一コマである。コロナ禍が終わった後も、「人間」の没落はつづくであろう。人類の苦難はさらに増大するにちがいない。

そんな時代に人の心を癒しうるのは文化だけである。そのことを私たちは今回のコロナ禍で深く知った。イタリアのフィレンツェでは、2020年3月、テノール歌手マウリツィオ・マルキーニ氏が自宅バルコニーで毎日、オペラ「トゥーランドット」のアリア「誰も寝てはならぬ」を歌い、隣家の人々を励まそうとしていた(3月15日 AFP)。歌の好きなイタリアらしいエピソードである。他にも、無観客コンサートを開催し、オンラインで人々の心を慰めようとした音楽家は世界中に多数いた。

2020年3月11日という早い時点で、ドイツの

グリュッター文化相は「文化はぜいたく品ではない。生命の維持に必要な不可欠な存在だ」と表明した。経済成長のことばかり考えている政治家や経済人には不快かつ不可解な発言だったろうが、音楽、美術、演劇などによって心を癒された経験をもつ人々にとって、この言葉は心の奥底に深く届くものだった。

毎年12月には日本各地でベートーヴェンの第九が演奏される。ところがそれが今年はきわめて少なかった。第九の演奏には100名近い演奏者と100名以上の合唱団が参加し、「密」になることを避けられないからだ。無聴衆のホールで「抱擁と接吻を全世界に」「すべての人々が兄弟になる」を歌っても空疎に響くばかりであるという意見もあった。

「抱擁と接吻を全世界に」「すべての人々が兄弟になる」は、すべての文化の根底にある原理である。それがあからこそ、文化は人を救うことができる。ところが今回のコロナ禍は、「すべての人々が兄弟になる」ことを不可能にする。コロナ禍においては、人を救ってくれるはずの文化さえもがわれわれからは奪われているのだ。

(高橋 義人)

2. 人類の知恵：世代を超えて継承すべき文化遺産

(ア) 文化継承の現状把握

文化の継承を考えるためには、「小さな伝統」を重視して伝承者自身の見方を考慮する必要がある。地域の人々が大切にしているものを考慮して、学校が文化の継承に果たす可能性を見直すことを提案したい。

ここでは文化の一つとして音楽を扱う。日本では多くの音楽文化が世代を超えて継承されてき

た。例えば、日本がユネスコに申請して「人類の口承及び無形文化遺産の傑作」のリストに加えることに成功した5つのジャンルをみてみよう。その中の雅楽は古代に誕生し、能楽は中世に誕生したものである。他の3つのジャンル、すなわち歌舞伎・文楽・組踊は近世起源のものである。これらは、世代を超えて継承されてきたもので、そこには、当事者の努力とともに、継承を確実にする

ための社会的な制度（例えば、家元制度や国立劇場による後継者養成事業）が働いている。

これらのジャンルの伝承者は、日本国内はもとより、海外にもいる。また、これらのジャンルが、日本の特定の地域においてだけではなく、広く国の内外で上演されている。これらは、その伝承と伝播が成功したため、グローバル的に知られるようになった例である。

日本の諸地域で伝承している芸能についても、その継承を確実にするために、国や地方公共団体が、「重要なもの」として指定を行う制度がある。すでに平成の時代に、国は京都・大阪・奈良の約20の多様な民俗芸能を「重要民俗文化財」に指定しているし、京都府・大阪府・奈良県はそれぞれの地域で伝承されてきた芸能（おどり、念仏、浄瑠璃など）を無形文化財に指定している（小島美子他（監修）『祭・芸能・行事大事典』下巻、東京：朝倉書店、2009、付録による）。

こうした指定を受けた芸能の中には、すでに生まれた地域だけでなく、日本の都市や海外での公演をたびたび行うなど、広い地域への伝播にも成功した例がある。こうした制度的な指定は、それぞれのジャンルを活性化させるという意味で、触媒の働きを果たしているといえよう。

一方で、公的な認知を受けていないジャンルの伝承者たちも、その伝承が消滅しないように努力している。尺八楽は、歌舞伎や文楽のような指定を受けていないが、日本音楽のジャンルとして、世界にもっとも広く伝播しているジャンルである。尺八の演奏者は、ヨーロッパ、北アメリカ・南アメリカに多く、その数は数千と考えられている。同じことは、地歌・箏曲についてもいえる。

地域の芸能でも類似した事情がある。国や地方公共団体の指定を受けていないジャンルでも、伝承者にとっては、「かけがえのない」ものであることは同じである。

これから、けいはんな地域における文化の継承を考えるためには、「上からの」価値判断によらず、伝承者自身の「下から」の見方を考慮する必要がある。それは、指定の有無、伝承される地域の大きさ、伝播の広さなどを考慮せず、「小さな伝統」を重視することである。

この点でまず行うべきことは、小さな伝統が、どのような伝承方法をもっているのかを詳細に調査し、それを確実にする方策を考えることであ

る。

日本における学校の音楽教育は、西洋社会での価値観に従ってきたため、ピアノや西洋的合唱、あるいは吹奏楽や管弦楽に重点が置かれている。課外活動を別にすれば、学校と地域の音楽文化との関連が弱い。2002年に中学校において和楽器の学習がカリキュラムに含まれることになったとはいえ、教える能力をもつ教員の不足で、その効果はいまだ限定的である。言い換えれば、教員養成のカリキュラムに地域の音楽が含まれていないのである。私は、東京都や宮崎県で生徒のために箏曲の講習会を開いてきたが、生徒の熱心さに較べると、音楽教員の関心は極めて低かった。しかし、この点で二つの動きが希望を与えている。一つは沖縄県が教員採用試験に沖縄の三線を課していること。第二は、日本で音楽の稽古に使われてきた唱歌（しょうが、楽器の音を声で出す方法）の指導が一部の小・中学校で始まったことである（その教材と方法は、徳丸吉彦（監修）、日本音楽の教育と研究をつなぐ会（著）『唱歌で学ぶ日本音楽：DVD付き（音楽指導ブック）』東京；音楽之友社、2019）を参照）。

また一般的に言って、日本音楽に関しても、地域を越えた共通の楽器や音楽を使用する態様があるように見える。例えば、三味線を教える場合、長唄三味線や地歌三味線が選ばれる。地歌三味線としては、日本で広く使われている地歌三味線とは別に、京都には柳川三味線がある。京都でも柳川三味線の伝承者が激減しているが、これを中学校で積極的に使用する動きはまだないようである。

繰り返すと、私の提案は、学校が文化の継承に果たす可能性を見直すことである。そして、文化としては、ジャンルの大きさではなく、地域の人々が大切にすることをまず考慮しようということである。一例を挙げれば、宮崎県椎葉村の竹之枝尾という集落では、小学校でその土地の神楽を教え、冬に行われる神楽の上演に小学生たちを参加させている。

また、実際の演奏を教えることができない場合でも、音楽教員がネットワークを作り、ある地域の伝統を共有して、生徒たちにDVDで見せることは可能であろう。これは、自分たちと周辺にどのような音楽があるかを教えることになり、それはまた、教科書に含まれる教材とは別の音楽がある

ことを知らせることにもなる。

(徳丸 吉彦)

(イ) 万博と文化継承

大阪・関西万博で日本文化を紹介し発展させるためには、「小さな音楽」を含めた多様なもの、海外で受け入れられている日本文化の実践者・仲介者・実践内容に目を向けることを重視すべきである。

2025年関西で万博が開催される。これが日本文化の現状を紹介する機会となるだけでなく、日本文化を発展させる機会となるためには、次の四点が重視されるべきと考えられる。

第一点 序列化を排して、多様なものに目をむけること：一般に万博では、それぞれの国を「代表する」音楽が紹介される傾向がある。それぞれの国がユネスコの無形文化財に登録したものを出す傾向が強まるであろう。しかし、それだけでは、多様な文化を知ることにならない。例えば、ベトナムやタイから多数民族の音楽だけでなく少数民族の音楽も、台湾からは漢民族の音楽だけでなく少数民族の音楽も紹介されれば、音楽の多様性に加えて、異なる地域の少数民族の間の関連も明らかになろう。ヨーロッパからは都市の音楽だけでなく、楽譜を使わない音楽が紹介されれば、日本人の西洋理解に貢献する。そして、来日した人々に対しては、日本の「大きな」音楽だけでなく、「小さな」音楽を聴く機会を与えたい。

万博が関西で開かれるのであるから、けいはんなの多様な音楽に焦点を合わせることが望まれる。

第二点 海外の日本音楽の演奏家・作曲家を招くこと：海外における日本音楽の演奏者（とくに尺八や雅楽の演奏家）・作曲者を万博で紹介すれば、それが日本人に影響を与えよう。これは、日本音楽が日本人だけのものではない、という事実を示すことになる。

第三点 海外における日本文化の仲介者に焦点を合わせること：これは、海外で日本文化を積極的に紹介している仲介者を紹介することを意味する。例えば、国際交流基金の海外拠点の一つであるケルン日本文化会館は芸術担当官を置いていた。そのハインツ＝ディーター・レーゼ Heinz-Dieter Reese は、300以上の日本音楽の演奏会を企画し、能楽・義太夫節・歌舞伎の詞章をドイツ語に訳して配布し、あるいは字幕にしてきた。それに加えて、ラジオによる詳細な紹介を行ってきた。その解説は、日本における演奏会のものよりもはるかに作品に密着したものであった。

類似の活動をしている人々が他の地域にもいるであろうし、また、美術・文芸についても同様な仲介者がいる。演奏家・作家だけでなく、こうした仲介者に焦点を合わせ、その方法を知れば、今後の日本文化の海外への紹介が一段と進む。

第四点 日本の旧植民地と移民を受け入れた国における日本音楽を紹介すること：1945年までの日本の植民地では、そこに住んだ日本と現地の人々が日本音楽を演奏し、伝承していたのである。例えば、昭和10年代の台湾では、日本の尺八の三つの流派である琴古流・都山流・上田流が、それぞれ演奏活動を行い、その影響が今でも残っている。国際連盟の委任統治領であったパラオでも、日本の歌が定着している。また、ハワイやブラジルなど、日本人が多数移民した国々でも、多様な日本音楽が実践されている。日本の植民地政策の負の側面とともに、これらの地域における音楽活動を評価すべき時期が来ていると思われる。万博を契機にして、こうした地域と日本との連携を深めることは、今後の日本文化にとって意義のあることと考えられる。

(徳丸 吉彦)

第四章 ニューノーマル時代の新たな文化創出

1. 第三のニューノーマル時代

2001年のインターネット接続サービス開始、2008年のリーマンショックに続いて、コロナ禍が第三のニューノーマル時代をもたらすことは確実である。本研究会が昨年度に展望した「目指すべき文化創造都市のイメージ」が社会実装されつつあり、第三のニューノーマル時代には常態化すると予想される。

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が地球規模で蔓延し、世界の社会経済活動が質量ともに長期にわたって同時停滞した結果、平時に比べてラジカル・イノベーション「創造的破壊」がはるかに加速される環境が発生したと想定される。現時点では未だ顕在化していない、あるいは帰趨の定まらないイノベーションの結晶核がコロナ後の社会で大きく成長し、新しい形式の経済活動へ導く可能性が大である。さらに長期的視点に立てば、新しい文化が芽生える契機にもなり得て、この期間を経ることにより新たな日本文化の創出につながるであろう。これが来たるべきニューノーマル社会の実相である。

外的因子の作用によってイノベーションが誘起され、旧常態（ノーマル）時代から新常态（ニューノーマル）時代へ一気にパラダイムシフトする現象を過去2回経験した。

最初の事例では、2001年にインターネットの無線接続サービスが開始されたのを契機として、2005年～2010年の期間に日常生活の場でインターネット接続サービスが爆発的に拡大普及し、本格的なネット社会が到来した結果、従来のビジネスモデルや経済理論が通用しなくなった。この不連続なパラダイムシフトを指して（第一の）ニューノーマル時代の到来と呼ばれるようになった。

第二の事例は、2008年のリーマンショック後に

起こった。リーマンショックの後遺症としての深刻な金融危機から経済が回復したとしても、根本的な克服課題を解決しない限り、元の常態には戻り得ないとの考えが広く浸透した結果、企業活動においてCSR(Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任) や SDGs (Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標) のような行動規範を明示する動きが急速に拡大し、第二のニューノーマル時代へとパラダイムシフトした。

あらゆる様式の間活動に制約を及ぼしている COVID-19 のパンデミックは、過去2回の事例をはるかに凌駕する規模であることから、第三のニューノーマル時代をもたらすことは確実である。1年間余りの社会経済活動の停滞を経験するなか、「日本文化創出を考える」研究会2019年度報告書の第一章「目指すべき文化創造都市のイメージ」でけいはんな学研都市の近未来に実現すると展望した活動形態の多くが日本のいたるところで一気に社会実装されつつあり、COVID-19 終息後に来たるべき第三のニューノーマル時代にはこれらが常態化するはずである。

本章では、2019年度報告書では触れなかったインターネットを活用した新たな音楽文化の芽生えとコミュニティ形成の動きに注目し、研究会で議論した結果を以下に報告する。なお、このトピックに関連して、国内47都道府県と海外9カ国の地域コミュニティから1,518名が参加したバーチャルおかあさんコーラス「きみ歌えよ」に「るる けいはんな」ほか、けいはんな地域のおかあさんコーラスグループから、それぞれ複数名のメンバーが参加したことを付記しておく。

https://www.youtube.com/watch?v=A_0bqYyeuQo&feature=emb_logo

(西本 清一)

2. インターネット経由で形成される新しい音楽コミュニティ

(ア) 新型コロナ禍における音楽産業の対応

コロナ禍により、コンサート、CD、音楽出版などの音楽業界の売り上げは25%減少した。一方で、音楽ストリーミングの売り上げは増加しており、ライブやコンサートのオンライン化は、コロナ禍を通じた新たな文化といえる。

新型コロナウイルスは、世界中で多くの死者を出しただけでなく、産業、さらには文化まで阻害、破壊してきた。ゴールドマン・サックスの調査によると、2020年の世界全体の音楽の売り上げは25パーセント減少したとのことである。また、音楽産業では多くの失業者を出し、その影響は甚大である。とくに、ライブやコンサートの多くが中止となり、大きな損失が生じた。

著作権協会国際連合によると、世界の音楽出版社は、20~35億ドルもの損失を出し、アメリカのコンサート業界だけでも90億ドルの損失が生ずる可能性があるとの試算まで出ている。コンサートやCD、音楽出版の売り上げは大打撃を受けた。日本においても、2020年の2月、3月においては、コンサートの延期公演数は1,550公演、損害額は450億円にのぼった。

その一方で、Music Business Worldwideによると、2020年度の音楽ストリーミングの売り上げは

10億ドル以上増加するとの試算が出ている。今後、数年にわたってコロナ禍が続いていくことから考えると、こうした状況に対応した音楽産業の再編が求められていくことと思われる。

また、ライブやコンサートのオンライン配信が行われることになった。CyberZ、OEN、デジタルインファクトの3社が共同で実施した、国内デジタルライブエンターテインメント市場に関する市場動向調査によると、デジタルライブエンターテインメント市場は、2020年は140億円、2021年は314億円、2024年には約1000億円規模になるものと予想される。ライブやコンサートのオンライン化は、コロナ禍を通じた新たな文化といえよう。

例えば、大規模なサザンオールスターズの無観客ライブ配信(2020年6月25日横浜アリーナ)では18万人が3,600円の視聴権を購入し、6億5,000万円を売り上げた。18万人というのは東京ドーム5万人の3倍以上の規模となる。また、大規模のコンサートでの観客対応のための膨大なスタッフ経費がかからないという利点もある。韓国の人気グループBTSが、2020年10月に開催したオンラインコンサートは、99万人が視聴し、売り上げは46億円を超えたとされる。

(熊谷 誠慈)

(イ) ユーチューブやTikTokから音楽界のスターに

インターネットの動画配信サイトからスターアーティストが誕生しつつある。クラシック音楽界においても同じ流れが起こって、若者たちを新たにクラシック音楽に惹き込み、音楽界に大きく貢献している。

通常、プロのミュージシャンになるためには、各プロダクションの主催するオーディションを勝ち抜くか、或いは、インディーズで多くの集客を誇るかのどちらかであった。しかし、近年、メジャーレーベルからでもインディーズからでもないアーティストが誕生しつつある。

それは、インターネットの動画配信サイトからである。近年、ユーチューブやTikTokなどから有名人“素人”が多数誕生するようになった。いまや、テレビで活躍する芸能人よりも有名な“素人”が多くいる。

そうした有名な“素人”はやがて、メジャーシーンに登場するようになる。TikTokで人気の出た瑛人「香水」は、ユーチューブでは1億回再生を超え、メガヒットとなった。また、歌手の「りりあ。」は、“浮気されたけどまだ好きって曲”を公開し、リスナーたちから曲名を募集した。結果、「浮気されたけどまだ好きって曲。」がそのまま曲名と

なったが、このようにオンラインを通じて、ファンたちを巻き込んだ形で楽曲を製作していくスタイルは、これまでには珍しく、話題を呼んだ。

同様の流れが、クラシック界においても起こっている。クラシックでプロの演奏家になるためには、音楽系の協会や財団が主催するオーディション・コンテストで入賞していくか、有名な音楽家のプロデュースで演奏会デビューをするかが一般的であった。そうした実績が評価されていく形で、オーケストラの団員になったり、ソリストとして活躍していくものであった。

しかし、最近、ユーチューブ上で、スタジオ演奏を公開したり、音楽の企画動画を上げたり、ストリート演奏を挙げる「セミプロ」のミュージ

シャンたちが活躍し、人気を集めている。よみいや、ハラミちゃんなどユーチューブチャンネルの登録者は、すでに100万人以上おり、複数のピアノ動画再生回数が1千万回再生を超えているのは、クラシックという分野から考えると極めて異例と言える。彼らは人気のポップスの曲のみならず、クラシックの名曲も演奏し、多くの再生回数を稼ぎ出している。彼らの活躍により、これまでクラシックに興味をもっていなかった若者たちが、クラシック演奏に興味を持つようになってきていることを考えると、音楽界への大きな貢献といえるであろう。

(熊谷 誠慈)

(ウ) 既存クラシック音楽の未来

コロナ禍のストレスを緩和させるのに、クラシック音楽を聴いた若者たちが多かった。オンライン配信の内容を工夫することで新たなファンを取り込むことも可能であり、新たな収益システムの確立が望まれる。

コロナ禍において音楽業界全体として大きな損失があったのは間違いないが、そのなかでオンライン化に舵を切ったアーティスト、すでにオンラインで活動していたミュージシャンたちは、活躍の場を広げることになった。

他方で、既存のクラシック業界の動きは遅いように思われる。オペラやクラシックのオンライン配信が始まっているが、それらの多くは無料公開となっている。しかし、有料のオンラインコンサートも少しずつ始まりつつある。

例えば、通常のコンサートでは体験できないようなサービスを提供する試みも行われている。歌い手の顔や、ピアニストの手元がよく見えるカメラアングルなど、コンサート会場では見られないような体験が可能となる。また、視聴者からの質問に、出演者がすぐに答えるなど、視聴者と演奏家との距離が近いといった点も好評であるようだ。このように、会場でのコンサートとは異なる点を魅力的にプレゼンテーションしていけば、有料化にも納得する視聴者が増えるであろうし、こ

れまでコンサートホールという敷居の高さが阻んでいた新たな顧客の取り込みも可能となる。

事実、クラシック音楽界にとって嬉しいニュースもある。イギリスのロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団の公表したレポート「The Classical Revival in 2020」によると、コロナ禍のロックダウン中に、クラシック音楽を聴いた35歳以下は59%にもものぼり、全世代の平均値(51%)よりも高いことが判明した。クラシックと疎遠な若者たちが、クラシック音楽を聴くに至った理由の1つは、コロナ禍で抱えるストレスを緩和させるのに、クラシック音楽が有効であったということである。今回のコロナ禍を通じて、クラシック音楽界は、若者という新たな市場を開拓したことになる。

さらに、今後、VRやヘッドフォンなどの技術が高まれば、コンサートホールでの演奏に近い臨場感と音質を提供できるようになるであろう。そうすれば、各地の交響楽団の演奏を、遠方に住む人でも容易に聴くことができ、新規顧客、会員の開拓も可能になっていくであろう。オンライン化を進めることで、一部の有名交響楽団が客を奪ってしまうという懸念も考えられるが、地方の楽団が独自色を出し、さらに、現地参加型の魅力的な企画を出していけば、地元のファンもつなぎ止め、他地域のファンを取り込むことも可能であろう。上記の通り、業界全体で「若者たち」という新た

なシェアを開拓していけば、どの楽団にも顧客を増やす可能性があるといえよう。ホールでのコンサート収入が激減しており辛い状況が続くが、あ

らたな収益システムを確立できれば、クラシック業界にも希望は見える。

(熊谷 誠慈)

3. 音楽のオンライン教育

オンラインの長所は、場所に関わりなく、時間を共有できることで、その長所を活かした音楽のレッスンやコンクールが可能となった。一方で、オンライン方式では実現しにくい面もあり、時間と場所を共有する第一次口頭性による教育は今後も必要であろう。

日本における音楽の教育は書記性(literacy)と口頭性(orality)を用いて行われてきた。明治時代の日本における西洋音楽の導入は、書記性、つまり楽譜に依存することが多かった。演奏によって音楽を直接教える人の数が限られていたからである。日本では近世から識字率が高く、日本音楽の楽譜や詞章の印刷が盛んに行われていたので、日本でピアノを習う人はバイエル教則本を、ヴァイオリンを習う人はホーマン教則本を大切に扱って勉強したのである。

日本音楽、例えば長唄、地歌・箏曲、あるいは尺八楽では、近代になると流派ごとに新しい記譜法、つまり、楽譜を記す方法が作られ、それによって作られた楽譜が広く公刊されるようになった。そのため、稽古の場でも書記性の役割が大きくなった。しかし、弟子が師匠の演奏をじかに見て・聴いて、音楽を教わるという口頭性は重視されているし、楽譜の使用を許さないジャンルもある。その場合は、師匠と弟子は時間と場所を共有しなければならない。こうしたイマ・ココデを原則とする口頭性を第一次口頭性と呼ぶことにする。

20世紀に入ると、書記性に加えて、録音による口頭伝承、そしてラジオによる口頭伝承も使われるようになる。これらは、電気技術によって、場所と時間を共有しないで伝える口頭性であるので、イマ・ココデを条件とせず、イツデモ・ドコデモを特徴とするので、第二次口頭性と呼ぼう。電話・ラジオ・テレビはココデという制限をなくし、レコード・テープ・CD・ビデオなどの録音・録画技術はイマという制限をなくした。確かに、

第二次口頭性的手段は、多様な音楽への接近を容易にした。しかし、それは電気が使えることを前提にしているため、電気が使えない地域では、他地域の音楽を聴くことも、自分たちの音楽を他地域に知らせることもできないままである。例えば、ベートーヴェンの《第九交響曲》の録音・録画が100種類以上に入手できても、1種類の録音・録画も入手できない音楽が現代でも沢山ある。

日本では邦楽・洋楽を問わず、レッスンでは書記性と第一次口頭性が中心的な役割を占めてきた。入学試験やコンクールでも同じであったが、2020年度に入ってから、オンラインによるレッスンとコンクール審査が行われるようになった。これはイツデモ・ドコデモを特徴とする第二次口頭性の録音・録画とは異なり、イマを特徴とする点で新しい試みである。決められた時間での本番が中継されるので、そこには他人が介入できない。審査する側は、受験生やコンクール応募者の身体の使い方、心理的なあがりの状態も観察することができる。

オンラインの長所は、ココデを共有せずに、イマを共有できることである。例えば、ドイツの音楽大学の教授の公開レッスンを、日本人学生がドイツに行かずに、日本から受けたのが、そのよい例である。また、日本では、オンライン方式が、2020年度に大学他の音楽のレッシと音楽実技の入試、そして音楽コンクールの一部で使われた。

これらの例は、特定の楽曲を演奏する能力を測るものであるので、オンライン方式でもある程度は可能である。また、新型コロナウイルスによる状況が起こる以前から、遠隔地からオンライン方式でレッスンを受けることは行われていた。例えば、土地の広いブラジルでは尺八のレッスンがこの方式ですで行われていた。こうした利点を考えれば、今後もこの方式は活用されるであろう。

しかし、多くの伝統音楽のジャンルで、口頭性による教育が行われ、オンライン方式では実現し

にくい面が重視されてきた。オンライン教育で、とくに、難しいのは次の点である。1. 特定の楽曲を急いで教えるのではなく、多様な楽曲を多様な方式で教えることで当該の音楽様式を弟子の身体に沁み込ませること。2. 特定の楽譜を固定したものと思わず、弟子に柔軟な音楽性を教えること。3. 弟子の身体的発達状況に相応しい教育を行うこと。したがって、今後もイマ・ココデ

を原則とする第一次口頭性による教育の必要性はなくならないであろう。

一方、多様な音楽を知らせる目的には、オンライン方式での教育がより大きな役割を果たすことが期待される。これは、第三章で述べた方針を実現するためにも有効である。

(徳丸 吉彦)

4. オンライン上での新たな文化創出

演奏家が能力を保つためには本番を経験することが不可欠であり、この点で演奏会のオンライン配信は大きな意義を持つし、聴衆は多くの演奏を聴けるようになった。オンライン配信への助成機関ができ、演奏家と聞き手がオンラインに慣れてきたので、オンラインによる新しい試みが可能になりつつある。

2020年度に、新型コロナウイルスのため、演奏会のあり方に変化が生まれた。まず、演奏者からの飛沫を避けるため、舞台に近い座席が使用されなくなった。客席数を半分にした場合は、横の席や前の席が使われなくなったので、観客として入場した人々はゆったり座ることができるようになった。演奏する側は、マスクを着用しての演奏を経験した。通常マスクだけでなく、マスクの下を止めないで、上から垂らす形のマスクも使用された。長唄や箏曲で歌う場所を分ける場合は、マスクが着用されると、観客には誰が歌っているのかが分からない場合もあった。しかし、これは、透明なマスクが普及すれば解決される問題であろう。演奏者が眼鏡をかけている場合は、マスクのために眼鏡が曇るのが難点である。詞章を舞台に置く決まりになっている長唄の唄方や義太夫節の太夫は苦勞したことであろう。

小さな劇場、例えば、東京の紀尾井小ホール(250席)では、観客と共演者への飛沫防止のために声と弦楽器の奏者にはマスクの着用を依頼した。そのため、2020年11月に予定されていた沖縄の組踊の公演は延期せざるを得なかった。声も出す組踊の踊り手がマスクをかけて演技することができないからである。

日本音楽でも西洋音楽でも、合奏する演奏者間の距離には最適なものがある。日本音楽では、顔や動作で合図をすることはないが、演奏者同士が聴きあうための最適な距離がある。西洋音楽、とくに弦楽四重奏のような室内楽では、顔や動作による合図が不可欠であり、そのために相応しい距離が選ばれる。こうした本来の距離が、飛沫防止のために長くされた。その影響は今後明らかになるであろう。

演奏家はその能力を保つためには、本番を経験することが不可欠である。それが、今度の事態によって失われた。これが続くと、演奏能力の低下が起こるのは明らかであり、すでに邦楽の演奏家から「勘が鈍った」という声が出てきている。この点で、無観客であっても、演奏会のオンライン配信は、演奏者に本番を経験させるものとして、大きな意義をもつ。オンラインによる音楽会には、有料と無料のものがああり、公開する時期の長さはいろいろである。しかし、聴衆は、実際に会場に出かける場合よりも、多くの演奏を聴くことができるようになった。これは、一つの長所である。

2020年度の緊急事態に対応して演奏会とそのオンライン配信を助成する機関が現れたのは歓迎すべきことである。助成を審査する組織が、典型的な演奏形態とともに新しい形態、そして、新しい試みを認めれば、新しい音楽文化の創出に貢献することになる。

また、企画するものが、新しい切り口で音楽会を開くことも、オンラインを使えば可能になる。例えば、『平家物語』で扱われている平敦盛をテーマとすることを考えてみよう。平家(平曲とも、平家物語を琵琶で語る中世起源の音楽)に《敦盛

最後》があり、能には《敦盛》が、また、同じく
中世起源の芸能で現在は福岡県で伝承されている
幸若舞（こうわかまい）にも《敦盛》がある。
義太夫節の《一谷嫩軍記》（いちのたにふたばぐん
き）の《熊谷陣屋》、山田流箏曲の《須磨の嵐》、
大和楽《須磨の敦盛》も同じ題材を用いた作品で
ある。これらの演奏者を一同に集めるのではなく、
オンラインで結び、全曲ではなくとも、部分でも
提示できれば、それは日本音楽の諸ジャンルの間

の緊密な関係の理解を促進する。

また、子守歌を中心にプログラムを組むことも
可能である。日本と外国で伝承されている多様な
子守歌を集めるのは、オンラインでならば可能で
ある。

演奏家と聴き手がオンラインの使用に慣れて
きたので、こうした試みの実現性が高くなってい
る。

（徳丸 吉彦）

第五章 世界に発信する日本の文化力

1. 受容→模倣→変容→成熟を経て創造されてきた日本文化

日本人は既存文化と外来文化の二重構造を受容し、調和成熟させて新たな日本文化を創出する一方、海外に向けた日本文化の伝播を通じて、日本文化そのものが循環しつつ発展してきた歴史がある。京都の伝統工芸技術の先に先進技術があり、さらに未来の伝統技術に成熟していく“ものづくり文化”は、技術と芸術が融合一体化した概念である。

京都の産業には2つの顔がある。西陣織、京友禅、京焼・清水焼、京漆器、京人形、京仏具ほか国指定17品目および京都市指定74品目を数え、「京もの」ブランド化した多様な伝統工芸品の制作工房を拠点に、長い歴史に亘って継承された技術や感性を湛えた伝統産業がしっかりと根付いている。

他方、明治維新以降に西欧の科学技術を移入した近代化の世紀を、伝統技術を基盤としつつ、短期間のうちに新時代への発展を遂げ、先進技術と幅広い業種の製造業や中小企業が集積する、世界でも有数の“ものづくり都市”を形成してきた。特に、商品の大量生産を目的とした工業化が進み、産業社会へと発展する過程で、繊維、電気・電子部品、計測・分析機器など、バランスのとれた産業分野で次々とベンチャー企業が起り、やがてグローバル企業にまで成長を遂げた第一世代から第三世代までの企業群は19社にのぼる。その多くが成熟した伝統技術を基盤として熟練工による“ものづくり力”を発揮し、時代の要請に応え得る新しい製品の量産化に成功した実績は注目に値する。

日本人は古くから土着文化と渡来文明・文化の多層構造を受容し、多様性を保持しながら新たな成熟を見出してきた。その基盤となるセンター機能が、京都にあった。

大陸の文明・文化を受容する以前の日本には、縄文・弥生文化を基盤とする独自の古代文明・文化が存在した。そこに大陸から新しい文明や文化

が渡来すると、日本人はいったんそれらをすべて受容する。そして次に起こるのが、取り入れたものを真似る模倣の段階である。こうしてコピーを繰り返している間に、次第に独自技法が確立されていく。その原動力となるのは、日本人が持っている美意識や遊び心である。ここまで来ると、模倣を超えて変容の段階に進む。

そして、渡来のものとは似て非なるレベルまで変容が進むと、成熟の段階に到達する。ここに至って日本独自の“ものづくり”技術が育ち、新しい日本文化が形成される。このような日本文化形成に到る道筋を俯瞰すると、概ね300年を周期として繰り返される複数の大きな潮流が併走してきたことが判る。日本人は古くから既存文化と外来文化の二重構造をフレキシブルに受容し、それらの調和に腐心して新たな成熟を見いだしてきたのである。

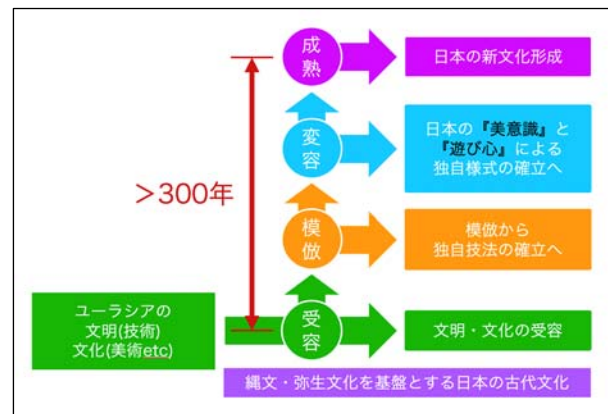


図 5.1.1 日本文化形成の一般図

ほぼ300年かけて確立した日本独自の技術で創られた“ものづくり文化”の精華はヨーロッパなどの海外でも珍重され、オリジナルの文明・文化の受容と相俟って、歴史的に重要な東西文化交流の一翼を担うまでに発展した。このような繰り返し起こる循環システムが、日本の“ものづくり文化”の歴史を特徴づけている。

シリア工芸の受容：その具体例を挙げると、京都の伝統工芸の一つに「京象嵌」という技法がある。なかでも金工象嵌の歴史は非常に古く、象嵌技術発祥の地シリアのダマスカスで作られた工芸品がシルクロード経由で飛鳥時代の日本に伝わった。

シリアの象嵌は、鉄の素材をノミで彫り込み、できた窪みに金を嵌め込む金工細工の技法である。それだけではなく、鉄の部分をアルカリ処理して黒く錆びさせ、黒い鉄地の上に嵌め込んだ金が際立って輝くように仕上げている。象嵌技術が生まれたころのアラブ世界はシリアを中心に化学、天文学、医学ほかの自然科学ほか、自然科学のメッカになっていたため、アルカリ処理といった当時の最先端技術が使えたのである。



図 5.1.2 象嵌工芸のクロスカルチャー

シリア工芸技術の模倣：美しいシリアの象嵌を目にした日本の工芸職人は、これを真似て自ら作ろうとしたであろう。ところが、日本ではアルカリ処理などといった技法はないから、鉄に金を埋め込むことはできても、下地の鉄を黒錆で加工することができない。

シリア工芸技術の変容：そこで考案されたのが、表面に漆を塗って黒くすることであった。

日本独自の工芸技術への成熟：ただ漆を塗って磨きただけでは黒が光りすぎるので、漆を塗ってから炎で焼いて焦がし、光沢を減らす処理を施す技法が考案された。ここまでくると、もはやオリジナルのダマスカス象嵌とは似て非なる工芸品に成熟を遂げる。

アラブ世界は、サラセン帝国の拡張とともに、ヨーロッパ大陸のスペインまで広がった。そのためアラブの文明・文化はスペインにも移植され、ダマスカスと同じ技法で作られた象嵌細工がスペインのトレドにも伝わっていた。

そして 16 世紀になると、スペイン人宣教師が京の都を訪れるようになる。彼らは京象嵌の工芸品を見て、東洋の果てに似て非なる象嵌があるのに驚き、京の土産品として故国に持ち帰った。こうしてシリアを起点とする象嵌細工は、日本を経由して京象眼に変容・成熟したのち、スペインの地にもたらされた。シリア文化と日本文化が象嵌細工を介して邂逅し、クロスカルチャーの環を閉じることとなったのである。

このように、いつの時代も古い技術を超えるような革新技術の飽きなき追求をし続けてきた結果、現在の先進技術に連なっている。伝統と先進という異質なものが並立するのではなく、何百年と培ってきた伝統工芸技術の先に、文字どおり先進技術があり、今の先進技術が未来の伝統技術に成熟する構図の循環を通じて“ものづくり文化”の基盤が支えられていると言えよう。“ものづくり文化”は、京都の伝統的な美術工芸をルーツとして発展してきた日本の製造業に共通するアイデンティティーであり、技術と芸術が融合一体化した概念である。それは、単なる工業技術あるいは産業技術とは一線を画し、文化価値を伴った技術なのである。

(西本 清一)

2. 絵画の変遷にみる日本文化の特質

日本絵画においても、渡来文明・文化の受容、模倣、変容のプロセスを経て、独自の絵画文化が開花した。京都は日本絵画の様式や技法が成熟する中心舞台であり、多様な技術を蓄積し、多様な工芸品に応用されてきた。

受容→模倣→変容を経て成熟に至った日本文化の具体事例として、日本絵画における様式と技法の変遷を見てみよう。

平安京遷都（794年）に先立つ5世紀ごろ（古墳時代）、中国大陸や朝鮮半島から一村一郷挙げて渡海し、山背の地（京都）に移住した「今来（いまき）の才技（てひと）」と呼ばれる秦氏や漢氏などの技術者集団が農耕、土木、建築、養蚕、製鉄、製紙、陶芸など、当時の世界で最先端の技術を京都の地にもたらした。

さらに7世紀（飛鳥時代）には、同じ大陸ルートで仏教が伝来する。それに伴ってインドや西域（中央アジア）を源流とし、釈迦中心の仏の世界を描いた仏教絵画の彩色技術が移植された。7世紀末ごろに描かれた法隆寺の金堂壁画（作者不明）は、アジャンター石窟群の壁画や敦煌莫高窟の壁画とともに、アジアの古代仏教絵画を代表する作品である。

その後も密教絵画（平安時代前期）やモノクロームの精神世界を表現する禅宗絵画（鎌倉時代）が入ってくる。世俗絵画では、唐絵や宋元画（平

安時代後期）が移植され、やがて日本で自立した新様式の室町水墨画が生まれ、江戸時代の文人画へと発展するといった、絵画様式変遷の流れができる。これら諸様式の影響を受けつつ、俯瞰法を特徴とするビジュアル絵画のやまと絵が平安時代の国風文化開花期に生まれ、長年を経て日本絵画技法の成熟に至る。

日本絵画史上最大の画派である狩野派は、水墨画とやまと絵の融合を果たし、室町時代中期から江戸時代末期まで四百年にわたって活動した。17世紀になると鎖国政策に伴って仏教絵画の伝来が途絶え、京都の富裕な商工業者である「町衆」が中心となって、純日本的な画題と絵画技法によるやまと絵に発展した近世屏風画や琳派による絵画中心の総合芸術を生み、独自の文化を開花させる。今でいう「クールジャパン」のはしりである。千年の都＝京都は、このように日本絵画の様式や技法が成熟を育む中心舞台であり、その過程で多様な技術が蓄積されたのである。このように成熟した絵画技法は、京友禅や京焼を始めとする多様な京工芸品に応用され、それぞれ特有の日本文化を形成する基盤になった。

渡来文明・文化の受容から成熟に至るプロセスをもう少し詳細に見ると、受容の次に模倣というプロセスがあり、その次に変容というプロセスを経て成熟に至るということがわかる。

（西本清一）

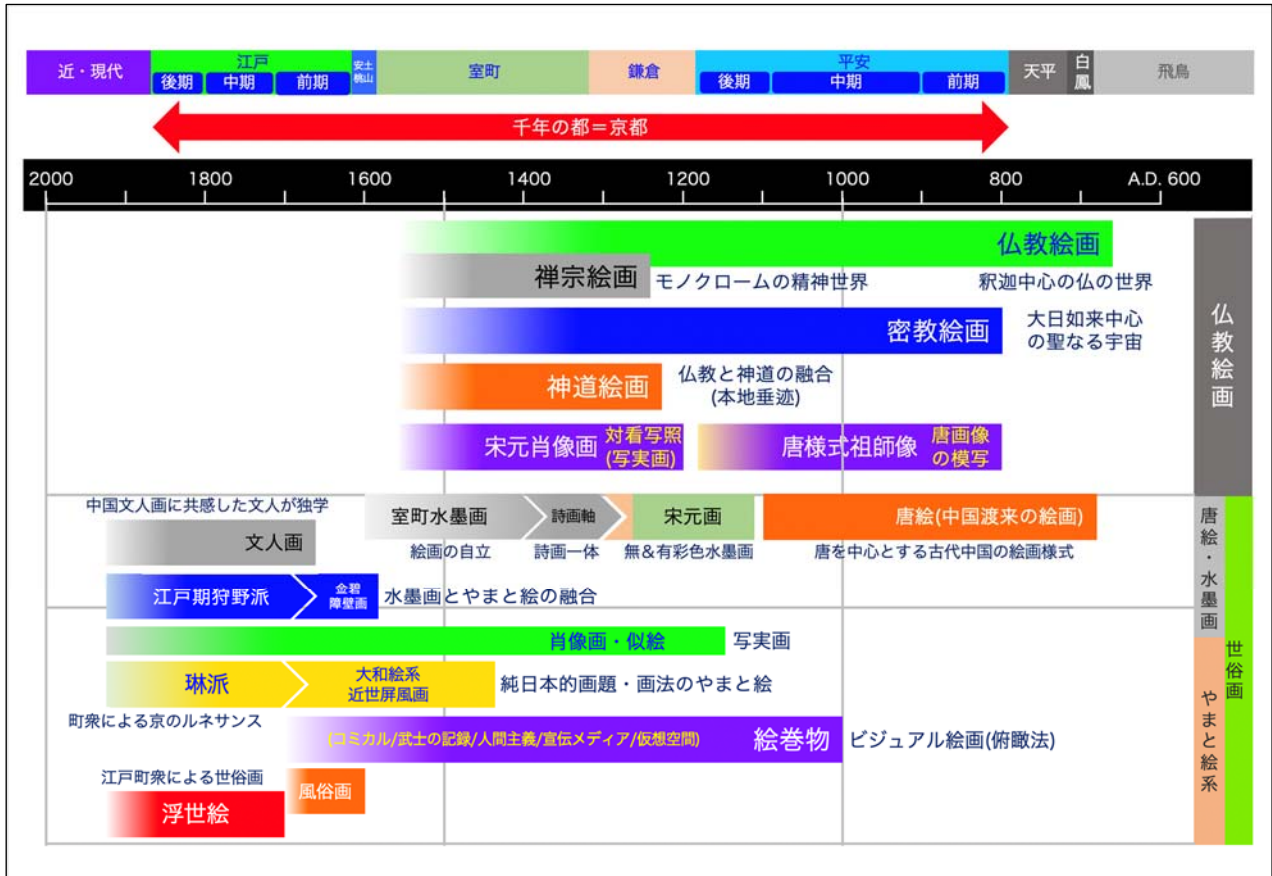


図 5.2.1 絵画の変遷にみる日本文化の特質

3. 人間と自然：二元論の西欧と一元論の日本

西欧の近代合理主義は、主体（理性または精神）と客体（情念や物体）の二元論から成り、デカルトの要素還元主義を基礎にして確立された。西欧では、理性ある人間は自然を利用することを神によって付託されていると考えるのに対し、東洋的自然観では人間は自然の一部であるとみなす。西欧近代科学の原理だけでは破綻しつつある現代、分析より総合を重視する立場で蓄積してきた“ものづくり文化”の無形資産（Intangible Assets）を可視化する必要に迫られている。

食糧の獲得を生命線としていた人類は、農業技術の進歩とともに余剰の食糧生産が可能になり、古代ギリシャの都市国家を形成するに至った。やがてそこでは、「人間は何処から来て、何処へゆくのか？」と思索する余裕が生じ、哲学が生まれた。

西欧社会の思想体系は、基本的に古代ギリシャの哲学に基礎をおいている。

「よりよく生きる」ことを目指したソクラテスの考えを継承したプラトンは普遍的で不滅な物質の本質「イデア」が重要であると説いた。この「イデア」は時代や場所とともに変化・消滅せず、人によって個体差が出ないとみなされ、後世のキリスト教的な「神」と、それを認識する人間の普遍的な「理性」や「精神」に重なる。プラトンの弟子のアリストテレスは、第一哲学（Metaphysics: 神学・形而上学）と第二哲学（Physics: 自然哲学）を定義した。第一哲学は神のように五感で認知できない対象を扱い、非物質的存在に関する知識、または最高度の抽象的存在に関する知識を得るのが目標であり、主に西欧圏で広まった。他方、第二哲学は五感で認知できる対象を扱い、すべての物質的存在または自然物を統率する変化の一般原理を明らかにするのが目

標であり、主にアラビア圏で広まった。この結果、西欧社会では神学の研究が長らく中心課題であり続けたが、十字軍遠征を契機としてアラビア社会の自然哲学が再発見されるに及び、16世紀から17世紀の西欧社会で科学革命が起こる。

従来、西欧の自然科学はアリストテレスを源流とする「生氣論」とデモクリトスの原子説を源流とする「機械論」の2大系譜がせめぎ合いながら発展してきた。16世紀以前の中世西欧社会は、比較的小さな生活圏を形成しており、自然に対して有機体論的世界観を共有し、精神的現象と物質的現象は相互に関連すると考えられていた。当時の西欧社会では、哲学と宗教という二つの権威が合致し、アリストテレスの自然哲学とキリスト教の教義を拠りどころに生活を営んでいたのである。

ところが、17世紀の科学革命期に登場したデカルトを境に機械論が圧倒的優位に立った。デカルトの考えは、観察対象となる自然現象や物質を、人間の心や感覚を介さず、それらを構成要素に分解する一方、単純な要素を総合して複雑な系に到達し得るとする要素還元主義に立脚していた。これは西欧近代の価値観に基づく理性的な人間による、人間中心主義あるいは理性中心主義の発見であり、主体（理性または精神）と客体（情念や身体を含む物体）の二元論を根拠とする近代合理主義の確立につながった。事実、デカルトは自らの著書「方法序説」を、「理性を正しく導き、学問において真理を探究するための方法の話（序説）」と位置づけ、全6部のうち4部に「わたしが……」で始まる見出しが付けられており、さながら理性開発方法序説の色彩を帯びている。

ここで、近代科学が成立した西欧の背景についても言及しておく必要がある。「知恵の果実」の物語（旧約聖書「創世記」）に、「神、汝等がこれを食らう日には汝等の目ひらけ汝等神のごとなりて善悪を知るに至るを、知りたもうなり」（エバを誘惑した蛇の予言）、さらにエホバ神「見よ、かの人われ等の一人のごとなりて善悪を知る。さればおそらくは彼その手を伸べ、生命の樹も取りて食らい、限りなく生きん」と記述されている（大橋良介：「日本的なもの、ヨーロッパ的なもの」、講談社学術文庫(2009)）。デカルトは、これを人間が「自然の主にして所有者」になりゆく第一歩であると「方法序説」で説いている。こうして理性的な人間（精神）は、唯一の超越神からその

創造物である人間（身体）と自然（物質）の支配権を付託されたとする考え方が、中世から現代に至る西欧キリスト教世界のドグマになったのである。極言すれば、神に付託された理性ある人間は、対決姿勢で自然や自然環境を意のままに破壊し、利用し尽くすことを神によって正当化されていると考える立場である。

近代西欧世界と自然科学のドグマに対比して、日本の“ものづくり文化”の基底を成す東洋的な自然観は自然を人間化し、人間は自然の一部であるとみなす思想に支配され、「山川草木悉皆成仏」（梅原猛の造語）で象徴される生氣論に満ちた世界を形成している。西田幾多郎がいう「分析より総合に重きをおいて、合目的なる自然が個々の分立より総合に進む」という立場を採る。

デカルトの機械論的世界観は、ニュートンに引き継がれ、西欧の近代科学あるいは近代合理主義思想が世界の中心原理になっていく。その哲学的基礎構造は、やがて20世紀になって爆発的に発展した自然科学研究の基本的パラダイムを成してきた。しかしながら、要素還元主義に立つ機械論的な科学が偏重された結果、学問分野や科学技術だけでなく、社会システムまでもが細分化の傾向に陥った弊害は否めない。

機械論の系譜に連なるニュートンは、われわれ人間に色相感覚を生じない無色透明の光（白色光）をプリズムに通したとき、それぞれの波長の違いに応じて7色（赤・橙・黄・緑・青・藍・堇）の色相感覚を生じる複数の光に分かれ、逆に7色に分けた光を再びレンズで集光して混合すると、元の無色透明な光に戻ることを実験で示した。100年ほどのち、生氣論の系譜に属するゲーテは独自の実験を展開して、その考え方を「色彩論」に著し、要素還元論的なニュートンの分光実験とその結論に異議を唱えた。朝永振一郎は、近代物理学の世界を評して「物理学の世界では、われわれの日常の世界のように、色とか、温かさとか、冷たさとか、音とか、そういうものはなんにもない。そのほかもろもろの自然の魅力になっているものが全部振動数であるとか、走りまわっている運動のエネルギーとか、そういうものに物理学の世界ではなってしまう。ですから物理学の方法で、実験で調べると非常に索漠としたそういう世界にぶつかってしまう。このことをゲーテは詩人らしく非常に嫌ったわけです」と述べている（「物理学

とはなんだろうか」岩波新書(1979))。

近代科学の視点からはゲーテの考えは認め難いが、人間の感覚で知覚可能な経験的現実として色彩現象を理解しようとした点で今日的意義がある。事実、伝統工芸の京染めはゲーテ流の色彩論が生きる世界である。さらに敷衍すれば、伝統工芸の基盤を成している暗黙知は、物理学など西欧近代科学の法則だけでは説明不可能な、人間の感性を総動員した生命現象と深い係わりのある何かが支配する世界の所産であるように思われる。京都の伝統工芸の工房で展開される“ものづくり”の現場では、分析より総合を重視した製作工程が随所に認められる。たとえば、京象嵌には、熟練した感性を頼りに、鑿（タガネ）を用いて鉄

地金の表面全体に1ミリ幅当たり7～8本の微細な溝を縦横に深く切り込む「布目切り」の工程が含まれる。また、仏具の鐘を鑄造する職人は、視・聴・嗅・味・触覚の五感を丸ごと動員して感じ取る第六感を重視する。原料の金属を高温で溶かして鑄型に流す工程で、熔けた金属の状態を五感で分析的に捉える一方、五感を総合した第六感を働かせ、高次の全体として捉えようとするのである。

西欧近代科学の原理のみでは破綻しつつある時代を迎え、伝統技術と先進技術が絶えず循環する日本は豊富に蓄積した無形資産（Intangible Assets）の可視化努力を求められている。

（西本 清一）

4. 文化力による自己の価値化と新たな幸福感

文化は人に「伝えたい」という思いによって成り立ち、集団における価値の共有に大きな役割を果たしている。コロナ禍の状況において、文化や芸術に触れることで自分の価値に気づき、他者の世界観に触れ、人との価値の共有を確認することが、私たちの幸福を支えていくであろう。

人の文化が残っていくというプロセスは、人から人への「伝えたい」という思いにより成り立っている。いろいろなものがある中で「これを伝えたい」と思うものを人に伝え、発信し、それを皆が見て共感することにより、多くの人に価値共有される。おそらく文化芸術が果たす役割はこのあたりに強く出ているはずである。

現状では様々な難しい意思決定が迫られている。人々の直接のコミュニケーションの機会に規制がかかる中で、お互いの一体感を持ち、安心して意思決定を行えるための材料を提供してくれる何らかの仲介物が必要なのではないかと思われる。たとえば食事会は「食べ物」を仲介物として、互いのコミュニケーションが促進されてきた。食事会が難しくなれば、やはりそこに芸術や文化のもつ機能が今ひとたび注目されるべきものとなるのではないか。

人は長い歴史の中で集団を作って生活をして

きた。円滑に集団生活を進め、互いの命を守り合うために、何らかの「意味」や「価値」を集団の中で共有してきた。言語や音楽もその一つであろう。人は文化を持つに至ったことにより、脳を爆発的に進化させた。そして「群れ」ではなく意味のある「集合」として機能するようになっていったのである。文学や音楽などの芸術や、建築物や道具を次世代に受け渡すことができ、次世代はそうして引き継いだものから学習を進めることが可能になった。そうして考えると今を生きる私たちの本質は文化と切り離して考えられるものではない。文化芸術に触れることで、私たちは日常とは異なる視点・スケールで考える機会を得ることができる。特に閉じこもることが推奨されてしまうコロナ禍の状況で、視点を広げて他者の世界観に触れることが果たす役割は小さくない。

また、私たちは文化や芸術に触れることで、そもそも自分が持っていた価値に気づくこともできる。そして、日常生活を支えてくれている身近な他者との愛情や、感謝の念を強めることもできるだろう。社会的交流から他者とのつながりを確認することが難しくなっているからこそ、人との価値の共有を確認することが私たちの幸福を支える新たな要因となるのではなかろうか。

（内田 由紀子）

付録 世界に発信する日本の文化力

～ニューノーマル時代の基盤構築に向けて～

京都スマートシティ EXPO 2020 【日本文化創出研究会・公開討論会（けいはんなプラザ）】

大槻（国際高等研究所）: 本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。ただ今より、公益財団法人国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会パネルディスカッション『世界に発信する日本の文化力 — ニューノーマル時代の基盤構築に向けて —』を開催いたします。

本日の司会を務めさせていただきます、国際高等研究所の大槻と申します。本日はどうぞよろしくお願いたします。

このセッションは国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会のメンバーにより提供させていただきます。西本先生には研究会の座長をお務めいただいておりますが、本日はセッションのファシリテーターをお願いしております。

それでは西本先生、セッションを始めていただきますようお願いいたします。

●趣旨説明



西本（京都市産業技術研究所理事/京都高度技術研究所理事/京都大学名誉教授）: みなさん、こんにちは。新型コロナウイルスの感染が蔓延するなか、今年はこの

けいはんなプラザのオンサイト会場と、オンラインで一般の方々にご参加いただいております。

私たちは、平素はクロードで研究会を開催していますが、昨年に引き続き、このような公開の場でみなさま方と一緒にいろいろと議論して参りたいと思っています。

最初に今年のテーマ設定について、趣旨を説明させていただきます。「けいはんな学研都市」の正式名称は「関西文化学術研究都市」です。京都、大阪、奈良の3府県に跨るけいはんなの丘陵地に生まれた新しい都市であり、構想から10年余りを経た平成元年から活動を始め、30年余りが経過しました。現在、140を超える研究機関、大学、文化施設が整備され立地しています。

この「文化」という名前を冠せた「けいはんな学研都市」に創設された公益財団法人国際高等研究所では、2017年度以来「日本文化創出を考える」研究会を毎年5～6回開催しまして、「日本文化とは何か」という思想的な探求を進めつつ、「日本固有の伝統文化」と「先端科学技術」の融合を通して新たな文化活用力を生み出す方策について議論して参りました。

2025年に開催予定の関西万博を機に、けいはんなの地から日本文化を世界に発信する具体策についても検討を進めています。

昨年度、初めて京都スマートシティエキスポに参画し、「けいはんな学研都市」の理念を念頭においた「街づくりと文化」および「文化を活用した産業創出」について公開の研究会を開催しました。

今年度は『世界に発信する日本の文化力 — ニューノーマル時代の基盤構築に向けて —』と題した公開研究会を開催することにしました。

2019年12月に発生した新型コロナウイルス感染症は瞬く間にパンデミックを来し、本来、「動く」主体である私たち人間の行動が著しく制限されるに至りました。この環境下で、従来とは異なる可能性と限界を感じながら新しい生活様式を見出しており、新たな文化が創出される予感すらある、そういう状況に置かれています。

このような体験を経て到来するニューノーマル時代は、新型コロナウイルス感染症拡大前の社会とは異次元の新たな社会基盤構築が必須になることは確実です。この状況に対応するための方策について、特に『日本の文化力』をキーワードとして、本日は、オンサイトあるいはオンラインでご参加のみなさま方とともに、一緒に考えて参りたいと思います。

先ず始めに、当委員会の委員として参画いただいております、先生方の専門性に照らし、新型コロナ禍のなかで気付かれ、深く考えてこられた論点を、順次ご紹介いただきます。先生方、よろしくお願いたします。

それでは最初に、熊谷先生から、よろしくお願いします。

●新型コロナ禍の中での気づきや考えたこと



熊谷（京都大学こころの未来研究センター准教授）：京都大学の熊谷です。よろしくお願いします。私の専門は仏教学で、チベットやブータンの研究をして

いるのですが、トップバッターですので、少しジェネラルな点からお話をさせていただきたいと思います。

今、西本先生からお話がありましたように、私たちは今まさにウィズコロナ時代に直面していますが、それを考える上で、東日本大震災と対比しながら考えていくことが大切だと思っています。震災復興のテーマは「絆」ということで、直接皆で会って団結して困難を乗り越えていこうということでした。しかし、今回のコロナ禍はソーシャルディスタンス、すなわち物理的な距離をとらなければならないので、絆をつくろうと思ってもなかなか直接会うことすらできない状況があります。これが今回のコロナ禍の難しさだと思います。

特に、大学教育におきましては、今は対面型の授業が強く推奨されているように思いますが、非常事態宣言が出てほとんどの大学が対面型の授業を止めてオンライン型に切り替え、当初は画期的で安全な手法だと賞賛されました。私の研究しているブータンでは特に高度な医療がありませんので、余計にオンラインが推奨されています。ただ、非常事態宣言が解除されて小中高の学校の授業が始まると、大学においても対面型の授業を再開するようにと要請が強く出るようになりました。結果的に、日本の場合は、他国でもそうかもしれませんが、対面型が優れた形で、オンラインは劣った形だという、一種の二項対立の状況が生じるまでになりました。

その結果、大学においては、原則は対面型で授業を行い、授業に来られなかった人たちのためにオンライン型で動画をライブ配信して、欠席した人たちのためにオンデマンドで録画を放送するという形になりました。このように対面とオンラインとオンデマンドの3つの形式をもって授業を

行うのが、これからの大学の新たな教育文化となっていくものと思われま

す。研究に関しても、学会はオンライン化が進んでいます。時間と旅費を気にせず参加できるということで、遠くの地域からの参加者も増え、オンライン化が概ねポジティブに評価されているようです。学会にも新たなオンライン文化が誕生しているわけです。

少し話は変わりますが、伝統文化に関しても、オンラインによって新たな文化が生まれつつあると思っています。例えば、これはコロナ禍以前からですが、YouTubeの登場が伝統芸能などを変えつつあります。これまで、オペラやクラシックなどは会場に行って生で観るのが絶対的なものであり、YouTubeで観る動画はアーカイブ的、サブ的なものに過ぎませんでした。しかし、コロナ禍においては対面式ができなくなり、オンライン、オンデマンド一択になってしまいました。そうした中で、音楽家の方たちが様々な動画を上げるようになり、中には大ヒットを生むような動画も出てきています。

ただ、日本古来の伝統芸能については、爆発的なYouTubeのヒットの実例を私はまだ知りませんが、やはりこれから日本の伝統文化も変わってくるのではないかと思います。私は仏教学が専門ですが、例えば、日本の寺ではコロナ禍の対応としてオンライン法事や、まだオンライン葬儀までは目にしたことはありませんが、新たな対面式ではない文化が出始めています。

実際に、西洋のクラシックやオペラでは、100万回再生や1,000万回再生という動画があります。これまでは、どれだけ大きなホールでも指揮をしても聴衆は数千人でしたが、今や1,000万人というオンラインの向こう側にいる人たちに向けてパフォーマンスを発信するという、そういう時代が変わりつつあるのです。そうした中で、やはり伝統芸能、伝統文化も新たな文化に変わっていくと思われま

す。コロナ禍を経て、このように新しい文化ができつつあるわけですが、ただ、これは芸術家の方たちが主体的に創り出したというよりも、必要に迫られて新たな文化が誕生せざるを得なかったという状況があります。それでも、何もせずに勝手に文化が起こっているわけではなく、それまでに新たな文化をつくろう、新たな技術をつくろうと

模索していたことが大前提だと思います。それがある条件下において爆発的にブレイクスルーが起きたわけです。それまではただブームが来なかっただけなのです。オンラインにしても、今まで取り組んできた人がいたわけですが、ただ時機が来ていなかったということです。

ですから、ブームがいつか来ることを強く期待しながら、日頃から文化の種蒔きをして準備をしていくことが、今後の新たな文化の創出につながるのではないかと考えています。

西本：ありがとうございます。

続きまして、新型コロナの感染が拡大するなか、アメリカに留学しておられて、それこそもう帰国の最終便という飛行機に乗って帰って来られた内田先生に、そういう経験も踏まえてお話しいただけます。よろしくお祈りします。



内田（京都大学こころの未来研究センター教授）：みなさん、こんにちは。先ほどの熊谷准教授と同じく京都大学こころの未来研究センターから参りました

内田と申します。本日はどうぞよろしくお願い致します。

ただ今ご紹介いただきました通り、私は昨年の8月からスタンフォード大学のセンターのフェローとして着任し、今年の6月までの予定で、アメリカで研究活動を行っていました。ところが、アメリカでは3月頃から新型コロナのパンデミックが大変な状態になってしまいました。私が住んでいたのはカリフォルニアのパロアルトという、サンフランシスコから車で南に30分くらいのところにある街ですが、そこもロックダウンになってしまい、段々と日本に帰るのも難しくなるのではないかという情勢が迫ってきました。そういう中で、本来的には6月までの任期があったわけですが、スタンフォード大学の方とも交渉しまして、「早く帰国した方が良いのではないか」という話になり、3月に緊急帰国することになった次第です。

そうした経験から、いろいろと考えることができました。私のバックグラウンドは心理学で、その中でも特に社会心理学、あるいは文化心理学と言われる分野を専門としており、基本的には感情

等、幸福感の比較文化研究をしています。特に日米を比較して、人々がどのような形で幸福感を追求するのか、感情経験の違い等について関心を持って研究を進めていました。まさにコロナ禍という、世界的規模で同じレベルの脅威が襲い掛かってきた中で、文化、人の心、そして集団としてどのような動きをとるのか等をまさに見せつけられた思いです。

良くも悪くもいろいろな形でグローバル化と言われ、文化の垣根がなくなるのではないかと考えていたような環境の中で、実際にはやはり私たちは文化や習慣等の違いを意識せざるを得なくなったのが、このコロナ禍の状況ではないかと思っています。

例えば、2月の初め頃のアメリカでは「コロナ禍は対岸の火事」という受け止められ方をしていました。したがって、多くのアメリカの友人からは、むしろ「アジアは大変そうだけれど、アメリカは安全で良かった」「由紀子の日本の家族は大丈夫なのか」と尋ねられるような状態でした。今では信じられませんが、確かに私もその頃は、「日本はこれから大変なことになるのではないか」「アメリカは関係なさそうだ」という雰囲気を感じていました。

ところが、3月になると、瞬く間に事態は一変しました。まずはニューヨークから感染が拡大して、医療崩壊が起こるという状態になってしまい、もはや対岸の火事ではなく、むしろもうアメリカがコロナ禍の中心的存在になってしまいました。そういう一瞬での変化も目の当たりにしました。

また、これもよくメディア等で報じられていると思いますが、マスクとソーシャルディスタンスという二つの文化的な政策の違いがありました。アメリカは最初、パンデミックが来そうだという話になった時に、ソーシャルディスタンスを重視しました。私が住んでいた街では厳格なほどそれが守られていました。つまり、他の人と2m離れなければならないので、例えば、銀行の窓口に行っても、客は銀行の職員とデスクを挟んで対面するのではなく、まず職員が2m下がってから客は窓口に行き、職員がデスクで作業をしなければならない時は、客に一旦後ろに下がってもらってから職員がデスクに近づくという、それくらい厳格に守っていました。郵便局で列を作る時も2mごと

の間隔で貼られたシールのところに並ぶようになっていて、それを破ると怒られるという光景も目にするくらいでした。

ところが、マスクを付けている人はあまりいなくて、そもそもマスクの市場への出回りが日本と比べて全く違っていました。日本は花粉症の季節や、風邪やインフルエンザが流行る季節には日常的な習慣としてマスクを使っている方がたくさんおられますが、元々アメリカではマスクを付けると、重病なのに無理やり外に出て来た人のようにスティグマ化される部分もあり、あまり好まれないということもありました。そして、感情的には、相手に安心感を与えるために笑顔や様々な形ではっきりと自分の表情を伝えることが価値づけられているため、口元を隠してしまうことに関する心理的な抵抗が大きかったのではないかと思います。したがって、マスクよりもソーシャルディスタンスをまずは選ぶということで、最初、その辺りは厳格に守られていたような気がします。

逆に、日本に帰国したら、ソーシャルディスタンスがなくて皆が非常に近い距離で、しかしマスクはしていました。最初は「距離をとらなくても良いのだろうか」と怖く感じてしまうところもありました。

そういう様々な反応の違い、そしてその後の感染の拡大やマスクに対する様々な議論を重ねて見ますと、やはり文化的な習慣や私たちが持っている心の働きというものは、こういうコロナ禍において現れてくる部分が顕著に見えてきます。

例えば、一つは認識です。このように新型コロナ感染が広がった原因は何かと考えた時に、日本であれば「このような原因もある」「あのような原因もある」というように包括的に物事を考える癖があると思われませんが、アメリカであれば「元々は中国から運ばれてきたウイルスで」というように一つの原因にフォーカスして、そこさえ上手く断ち切れれば打ち勝つことができるのではないかと、そういう感覚が特に当初は強かったように思います。

また、感情的にも、今の日本は「ウィズコロナ」とか「コロナ社会をどう共に生きていくか」という考え方に段々と変わってきていると思いますが、やはりアメリカの社会は「beat the corona」でとにかく新型コロナに打ち勝たなければなら

ない、どうシャットアウトして打ち勝つかという戦いのモデルが様々な形で人々の口の上に上るという状況があります。

そして、やはり日本においては、一時期非常に過剰になった部分でもありますが、見張り合いのシステムができました。政府から強いロックダウンの指令が下りるわけではないけれども、自分たちの中で互いに、マスクをしていないとか、何らかの形で感染の予防に反するような行動に対する強い警戒心が生まれ、自粛警察と呼ばれるようになり、社会的な規制の中で予防していこうという動きが強く見られたように思います。

そうした中で、私が研究してきた「幸福感」という観点からは、今のコロナ禍の状況において、今までであれば簡単に得られたようなこと、例えば、皆と集って楽しく食事をするようなことも難しくなることの問題も見えてきました。

しかし、そういう今の社会の中でも、もう一度私たちの「幸福感」を見つめ直し、今の時代だからこそ、もう一度家族の大切さや、何かがあれば頼り合えるような関係性の大切さなど、コミュニティの力のようなものを再興していくことが、恐らく今の日本の文化や社会の中で非常に重要な幸福に関する処方箋となるのではないかと考えています。

また、幸福と健康は表裏一体だと思いますので、健康を保ちながら、且つ幸福を減じないようにしていくためにはどうしたら良いのかということも、日本文化の様々な価値観や習慣の中で感じられる部分もあるかもしれませんし、またそれが世界に向けてのモデルとして広がっていけばとても良いことではないかと考えております。

西本：ありがとうございました。

次に、人間の行動が制限されるなかで、改めて人間には文化が必要であると再認識したと言われる高橋先生、よろしく申し上げます。



高橋 (平安女学院大学特任教授/京都大学名誉教授): 高橋です。今、内田先生がアメリカと日本を比較されました。私はヨーロッパのことを研究していますので、ヨーロッパと比較した話をさせていただこうと思います。

今回の新型コロナ騒ぎは中国で始まり、やがて世界中に広まり、中国、ヨーロッパ、アメリカ、韓国といった国々ではロックダウンがなされました。ロックダウンというのは、個人の自由を縛ることで。他方、日本ではロックダウンがなされませんでした。日本国民一人ひとりの良識と自粛に頼るという政策がとられました。それで果たして日本は新型コロナを抑えられるのかと思った欧米の人たちは多かったようですが、結構これで上手くいきました。つまり、個人の自由を縛るという方法ではなく、日本人は公共性の観念を持って公共性に益することをしてきたということになると思います。

今度の新型コロナ騒ぎで、ヨーロッパ、アメリカ、アジア諸国の国々の市民像や市民の概念の違いが随分と際立ったと思います。この点で思い起されるのは、マックス・ヴェーバーです。彼は19世紀末、『宗教と社会学』という分厚い本の中で次のような問題提起をしています。なぜヨーロッパだけにルネッサンスが起きたのか、なぜヨーロッパだけに産業革命が起きたのか、なぜヨーロッパだけに文明が栄えたのか、なぜヨーロッパだけに民主主義があるのか、なぜヨーロッパだけに資本主義があるのか、それに対する答えをヴェーバーは「市民」に求めます。ヨーロッパには市民階級というものがあるから、他の地域には市民階級がない、ヨーロッパには市民階級があったため、すぐれた文明や文化が育ったというのです。さらに彼はそこから、そういう市民階級を作り出したのは良くも悪くもキリスト教なのではないか、キリスト教のなかでもプロテスタントなんじゃないか、カトリックとプロテスタントを比べると、プロテスタントの方が勤労意欲が高いんじゃないか、と考えています。

ヴェーバーはヨーロッパ中心主義者だったので、彼の言葉はかなり割り引いて聞かなければなりません。しかしヴェーバーが言うように、文化や文明を生み出すには「市民」の存在が不可欠だと考えている人たちは多いでしょう。そういう人たちにとって、日本という国があるということはとても大きな発見でした。どうしてキリスト教でない日本が欧米並みの飛躍的な成長を遂げ、文明を発展させ、産業革命を成し遂げ、資本主義社会をつくり、日清戦争、日露戦争にも勝ったのか、人々は驚きに目を睨りました。人々はそこで初め

て、日本のようなキリスト教とは無縁の国にも「市民」があると知りました。そして日本鼻屑になった人々がたくさん出ました。それだけに彼らは、第二次世界大戦における日本の振る舞いに大いに落胆しました。あのように他国を侵略し支配するという事は、やはり野蛮さの表れか、日本にはやはり「市民」は育っていなかったのか、日本に民主主義はなかったのかと思いました。

そういう文脈のなかで、今回の新型コロナ騒ぎを見る必要があります。ヨーロッパやアメリカではロックダウンという方法で市民の行動を上から押さえつけなければ新型コロナを終息させることができなかったのに対して、日本は別に上から押さえつけて従わない者を投獄するとか、罰金を取るとか、そういうことは今のところしていない、それなのに、日本人は自発的に外出を控え、自粛し、皆がマスクをし、ソーシャルディスタンスをとっている、日本人はヨーロッパ人よりも市民的道德、公共心があるんじゃないだろうか。欧米の人々はおそらくそういう眼で日本を見ていると思います。

では、アジアはみなそうかという、そうではありません。中国や韓国など、日本の隣国の国々ではやはりロックダウンをしたり、スマホで市民の行動を管理したりして、個人の行動を上から支配するという方法をとっています。いわば全体主義的な政策です。それは、日本では到底受け入れられるものではありません。日本は個人の自由をある程度大事にしながらも、公共性を大事にし、他者との付き合いを大事にしようとしています。ちなみに、そういう他者との付き合いを大事にするという精神は、東京よりも関西の方がずっと強いでしょう。私は東京の出身なので分かりますが、東京人はそれほど他者との付き合いを大事にしません。関西の方が3割くらいは強いと思います。関西のほうが東京より歴史のある古い地域です。日本は元々他者との付き合い、コミュニティを大事にする国だったんじゃないかと思います。

ところが、そういう国のあり方が、インターネットの普及、スマホの普及、SNSの普及等によってかなり脅かされるようになってしまいました。自分の顔が見えないところで人々は芸能人の悪口を言ったり、クラスメイトの悪口を言ったりするようになりました。これは昔の日本人では到底許されないことでした。顔の見えないところで悪

口を言うという、昔は許されなかったことが今は平気でまかり通っています。これはコミュニティを破壊する行為、してはならない行為です。

ですから、もう少し顔の見える社会に戻す必要があると思います。コミュニティを大事にし、地域社会を大事にする必要があります。地域社会を大事にするということは、日本の特質性、関西の特質性、京都の特質性、村落の特質性を大事にするということです。特質性を大事にするところから本当の文化が生まれてくるのです。

今、私たちはもう一度立ち止まって反省し、考え直す時機にさしかかっているんじゃないだろうか、新型コロナはそういう機会を私たちに与えてくれたのではないか、そのように思っています。

西本：ありがとうございます。

続きまして、人間が手にした大きな文化価値である音楽について、けいはんな地区コミュニティの音楽という視点から徳丸先生にお話しいただきます。



徳丸（聖徳大学教授、お茶の水女子大学名誉教授）：徳丸でございます。私は音楽を取り上げて、新しい文化を創る、あるいは伝統を保つためにはどうしたら良い

かということを考えました。3点お話ししたいと思います。第1は学校の役割、第2は日本音楽が日本人だけのものではないということ、第3は大阪で開催される関西万博にどのように協力するかということです。

第1は学校の問題です。学校で音楽を教えますが、その目的の一つは、地球上の他の地域に住んでいる人たちも自分たちと同じように音楽を持っているという事実を子どもたちに教えることです。日本の学校は、遠い西洋の地域に住んでいる人たちが音楽を持っていることを熱心に教えてきました。しかし、日本のどの地域にも立派な音楽があることは教えてきませんでした。

けいはんなでの音楽活動を盛んにするには、けいはんなを一つのまとまりと考えて、そこに含まれる地域の音楽を相互に知る仕掛けを作る必要があると思います。けいはんなと一括りにしても、案外隣のことを知りません。そこで、地域の音楽を相互に知ることができれば、けいはんな全体の

音楽にとって優れた聴衆が生まれることになります。学校では、全国共通の唱歌や他の教材に時間を割きますが、自分たちの周りの音楽を知ることがけいはんなから始めて、統一的な教材よりも地域の独自性を強調するべきだと考えます。

そこでまず、学研都市に含まれている地域の童歌（わらべうた）だけでも、小学生が互いに知るための仕掛けを作ることから始めたいと思っています。例えば、京都府は随分と前に地域の民謡や童歌をCDにして発表していますが、他の地域の教育関係者はこのことを全く知りません。相互に認識することは、音楽教員がネットワークを作ればできることです。

同じようなことはテレビやラジオにも言えます。テレビやラジオも「けいはんな音楽の時間」というものを作るべきだと考えています。例えば、京都には柳川三味線という独特の響きを持った楽器がありますが、今は演奏者が激減しています。大阪や奈良の人だけではなく、京都でも知らない人が増えています。これを知る人を増やすには、オンライン型の活動でも可能ではないかと考えます。

第2に、日本の文化、あるいは日本の音楽を創出するのに忘れてはならない事実として、日本音楽が日本人だけのものではないということを指摘したいと思います。私は10ヶ国以上のヨーロッパの国々、アメリカ、カナダ、そしてアジア、特に韓国で長い間、日本音楽を紹介してきました。それで、私はよく日本人から「そういう国の人々は日本音楽を分かるのですか」という質問を受けるのですが、質問する日本人は日本人でありながら西洋音楽も分かっています。ですから「あなただって西洋音楽を分かっているのだから、向こうが日本音楽を分かるのは当たり前でしょう」と言うのですが、なかなかこの点は理解されません。

最近、調べ直したところ、ヨーロッパと北アメリカは日本音楽の研究水準が非常に高いことが分かりました。一方、演奏に関して言うと、雅楽、能楽、箏曲、尺八音楽では優れた能力を持った人たちがヨーロッパだけではなく、南北アメリカに大勢います。それから、ヨーロッパの優れた音楽大学、例えばモスクワにあるチャイコフスキー音楽院やワルシャワにあるショパン音楽院など、そういうヨーロッパの中でも有数の音楽大学、あるいはアメリカにあるカリフォルニア大学ロサン

ゼルス校も同様に、日本音楽の実技を教えたいと考えています。それで日本側に教師の定期的な派遣を要求しているのですが、日本政府はこうした要求にまだ応じていません。

繰り返しますが、日本音楽は今や世界の音楽の一つです。日本人だけが新しい日本音楽を創出できるという考え方は捨てなければならないと思います。

ここまでは新型コロナの状況でも可能なことです。

第3の話として、2025年に万博が開かれますので、その機会を捉えて、私は日本音楽をもっと活性化したいと思っています。まず、世界に散らばっている日本音楽の演奏家や、そしてそれを研究する人たちのシンポジウムを開けば、世界における日本音楽の現状を知ることができます。例えば、ブラジルには日本と同じ種類の竹が生えているところがあり、それで尺八が作られ、尺八を演奏する人々がグループ活動をしています。ブラジルは元々土地が広いので、新型コロナが流行する前からオンラインのレッスンが行われていました。

また、万博の中で、けいはんなに特徴的な音楽と楽器、例えば、三味線、箏、尺八、胡弓、あるいは雅楽の楽器、こういうものを使った演奏と作曲のコンクールを開催することも意味があると思います。欧米で開催されている西洋音楽のコンクールをご存じだと思いますが、チャイコフスキー・コンクールやショパン・コンクールなど、そういうコンクールで日本人が入賞しています。あるいは開催国以外の人が入賞しています。日本音楽のコンクールを日本で開催し、そこで海外の人が入賞すれば、日本人が自分たちの音楽を見直すことになるでしょう。

結論として申し上げます、第1は、地域の伝統を互いに知ってけいはんなが一つの文化だということ子どもたちに意識させていくこと、そして海外における日本音楽の活動を評価すること、この二つが日本文化の創出に欠かせない方法だというのが私の結論です。どうもありがとうございました。

西本：ありがとうございました。

私たち現生人類の先祖をたどりますとクロマニオン人にたどり着きます。それが直接の先祖で

す。そのクロマニオン人よりも少し早くに生まれた、同じような人類にネアンデルタール人がいました。それで、クロマニオン人はネアンデルタール人よりも体力では劣っていましたが、生き長らえたのはクロマニオン人でした。その一つの大きな要素として、クロマニオン人にはコミュニケーション力がありました。つまり、言葉で相手と語り合いながら協働作業ができたということであり、大きな動物にも協働で立ち向かえたわけです。一方でネアンデルタール人は体力があったので、1人で立ち向かいました。そこに大きな差があったのではないかということです。

それから、最近も新しい研究論文が出ていますが、ネアンデルタール人はある意味で感染症に弱かったようです。現在の新型コロナ感染拡大の状況下でその関係が指摘されています。同じクロマニオン人でもたどって来たルートによっては、ネアンデルタール人とも交配するなかで遺伝子が変わり、ネアンデルタール人の遺伝子を受け継いでいる部分があることはすでに実証されています。民族によって遺伝子の受け継ぎ方が異なるため、感染症拡大の度合いと関係があるのではないかと、一番新しい論文で報告されているわけです。

熊谷先生は、人間のコミュニケーションについて採り上げられ、新型コロナ感染のパンデミックの渦中で新たな様式が出現した点に注目されました。人間社会ですでにインフラとして整備されたインターネットを通じ、新たなコミュニケーションのツールを持ったこと、皆が隔離されているけれども、全世界がそういうツールでつながったということ、それは可能性もあるが、限界もあるという二面性を指摘されました。

内田先生は、元をたどれば同じクロマニオン人に行き着いても、それぞれ民族性によって捉え方が違うということ、このコロナ禍の状況下で異国にいた体験からお話されました。そこにはそれぞれの民族が信じている宗教も絡んでくるという内容でした。

人類が究極にたどり着いたシステムとして都市を形成するなかで分業が起こり、それぞれの持ち場で役割を果たすことで自らを守る術を身につけたわけですが、高橋先生は、基本的に個人と都市コミュニティの市民との立ち位置、個人と公共が大事であると指摘されました。今回の新型コロナ感染拡大のなかで個人の自由が制約されて

いると感じ取っているけれども、実はそれはコミュニティの制約で、個々人が自らの自由を主張して行動すれば、集団としての防衛は成り立たないのではないかということ、そういう意味で、個人の自由も、コミュニティとして集団を守るという行動も共に大事だという二面性について、個人と公共という観点からお話いただきました。

そして、徳丸先生は音楽を採り上げられました。恐らく私たち人間が集団で行動するなかで、嬉しい時に音楽が出てきますし、悲しい時にも音楽が出てきます。そういう意味では、コミュニケーションと同様に音楽は人間にとっての文化価値であるという観点から、土地としては古い地域であるけいはんなを新たに拓いて住み着いたのであれば、新たな文化価値を見出そうではないか、その一つのターゲットとして関西万博に向けてけいはんなのコミュニティとしての音楽を追求してはどうか、そういうご提案をされました。

このようなお話を背景としまして、オンラインでご参加いただいている方々から、コメントなりご質問などをお受けしたいと思います。どうぞご自由にご発言ください。よろしくお祈りします。

● 質疑応答・意見交換

Q 1. 万博を機に、どのように「和の心」を世界に発信できるか

参加者 A：本日は大変素晴らしいお話を伺い、感銘を受けているのですが、実は、私が勤務していますけいはんな地区の高の原にある奈良市立北部図書館も、コロナ禍で5月～6月にかけて休館という未曾有の事態になりました。日頃から新聞を読みに来ていただいている方や、本が好きで来ていただいている方が図書館に来て開いていないという事態になり、私たちとしても忸怩たる思いで、もちろん再開が前提ではありましたが、再開した後、どうしていくかということも含めていろいろな思いがありました。

その中で、けいはんな地区において、関西万博に向けた様々なグラスルーツの取組みが進められていたので、私も個人で参加し、新たなつながりが生まれました。コロナ禍についていろいろな議論がある中で、やはりしなやかにつながっていく、レジリエンスのつながりが大事ではないかと

思います。

そういう中で、奈良市に住んでいることもあって、先ほど高橋先生からもありました地域の特殊性について考えることがあります。地域に昔からある資源として、例えば竹や『万葉集』『新古今集』に代表される和歌など、この地域には日本の伝統文化があります。これを、それこそ熊谷先生が言われたようにオンラインを含めて世界に発信していきたいと思っています。「和の心」を世界に伝えていくということです。もちろん、言語の壁もあると思いますし、世代の壁もあるかもしれませんが、そういう壁をどのように乗り越えていけば良いかというのは、自分自身でもまだ掴めていないところもありますが、本日のお話をお聴きして見えるものもあると思います、地域の皆さんともっと取り組んでいきたいと思っています。

ただ、その心を伝えるには、もちろん芸術やこの地域に30年間で進歩発展してきた技術の力など、そういうものを全部使って、いかに発信できるかということが、個人としても公共としても命題になっていると思います。その辺りについて、先生方はどのようにお考えでしょうか。よろしくお祈りします。

西本：ただ今のコメントに対して、徳丸先生のお考えはいかがですか。

徳丸：和歌も重要な文化財ですが、童歌も民謡も大事な文化財です。音楽を文化財と意識しない人が結構いるので、それを忘れないよう共有していきたいと思っています。

日本の文化の研究は、特に西洋ではとても進んでいます。『古事記』の英訳がありますし、我々が考えている以上に和歌や俳句を作る人もいて、現地の言葉で俳句を作る人もかなりいます。そのように、すでにその形ははっきりしているわけですから、そういう地域で活動している人たちが相互に知り合って、どうすればさらに先に進めるかを考える、そういう機会を与えるのが万博ではないでしょうか。

西本：高橋先生、いかがですか。

高橋：日本に来ている外国人に「日本人をどう思うか」と尋ねますと、多くの人が「日本人は皆、

平和そうな顔をして歩いている」と答えます。これは大事なことです。平和そうな顔をして歩いているということは、日本が安全な国だということです。あまり犯罪がないということです。日本人は郵便局に行って、財布を棚の上に置いたまま他の用をすることがあるでしょう。それでも別に財布を盗られることはありません。ところが、ヨーロッパやアメリカで同じようにすると、必ず盗られます。日本で欧米ほどたくさんの警察官が必要でないのはそのためです。

そういう安全な国においてこそ、文化は生まれます。安全な方が落ち着いて美味しいものを作れるので、食文化が生まれます。隙のある格好をしていても、モノを盗られないのでファッションに凝ることができ、ファッション文化が生まれます。人々とのやり取りに心を配り、短歌や俳句を使って文通し、そこから文学が生まれます。

「日本人は平和そうな顔をして歩いていますね」と言われるような今の状況、これをなくしてはならないでしょう。それが個人の自由と公共性のバランスということと深い関係があると思っています。

西本：熊谷先生、お願いします。

熊谷：いくつかご質問があったと思いますが、言語の壁は、例えば Google 翻訳を使えば、最近では文書に関してはかなり正確に翻訳できるようになっていると思いますので、そうしたものも活用しながら発信していけば良いと思います。

「和の心」をどう伝えるかというのは、「心」とは何かという定義が非常に難しいので今後の課題ですが、各自が自分の「和の心」の味わいというものをそれぞれ伝えていき、多数の情報が集まれば、偏りも減っていくと思いますし、例えば、言葉で伝えられなければノンバーバル言語、例えば YouTube や VR を使った視覚・聴覚的な伝え方もできます。他方で、嗅覚・触覚・味覚等をどのように伝えていくかは今後の技術の発展を祈ることになると思います。

西本：コメントをありがとうございました。

Q2. 日本文化の進展に向けて着目すべきものは何か

参加者B：深い話をありがとうございました。先生方のお話を伺って、「文化」という言葉から「自然発生」「自然淘汰」それと文化を弁別するための「フィルタリング」その研究というタームが浮かんできました。このアフターコロナ、ニューノーマルに向けて、そういうフロントランナーのそれぞれの役割が上手く回ると日本文化が展開できるのではないかというイメージを受けました。

先生方それぞれのフロントランナーとなるべきものは、今後何だとお考えでしょうか。その辺りのサゼスチョンをいただければ光栄です。

西本：いかがでしょうか。

徳丸：すみません。もう一度最後の質問を繰り返していただけますか。

参加者B：日本文化が発生し、展開されていく時には、自然発生、分別＝フィルタリングがあると思いますが、その間で徳丸先生が言われたような民謡やそういうものをきちんと調査して、カテゴライズして、フィルタリングして展開していくという、それぞれの役割が上手く回ってこそ日本文化というものが熟成されて進展していくのではないかという印象を受けました。

それで、このアフターコロナでそれぞれの役割として「これは着目すべきである」というものがあったら、是非お教えいただきたいと思います。

徳丸：正確にお答えできるかどうか自信がないのですが、できるだけ周りの音楽を聴こうというのが私の第一の提案でした。けいはんなと言いながら京と阪と奈が互いに離れていては困るので、広い文化領域をつくろうということです。

一方で、外国のことを言いましたが、それは日本の音楽が外国の音楽と融合する可能性があるからです。それを否定するものではありません。ですから、我々が日本音楽と思っているもの、例えば、学校では箏曲と言えませんが宮城道雄作曲の『春の海』を出しますが、あの曲は昭和4年頃

にできた作品で、西洋音楽がなければ生まれなかった作品です。そういう融合したものを伝統として皆が珍重しているわけですから、これからの伝統はさらに融合の進んだものになるだろうと考えられます。

そういう意味で、海外の日本音楽の活動、海外の方に日本音楽の作曲を依頼する、演奏を依頼するということが意味のあることだと考えます。的外れな答えになるかもしれませんが、取り敢えず宜しいでしょうか。

西本：他にはいかがでしょうか。

高橋：今日、日本文化がどれほどあるかと考えると、私は少しスケプティックな気持ちになります。三島由紀夫は近代の日本の文化について、これまで日本は、雅や侘び寂びといった、それぞれの時代に適した文化様式を生み出してきた、しかし、明治以降の日本は何も生み出していないのではないかと、と言っています。文学の面では夏目漱石も鴎外も、谷崎も川端も、三島自身もいたわけですが、その三島に、あなた方のような偉い作家がいるのではないかと、彼は、自分たちは昔の作家ほど偉くないと答えるのが常でした。では、どうして日本文化が衰退してきてしまったのか、三島由紀夫はその点について問いつづけました。

近代日本文化が衰退してしまっただけで、明治維新以降の日本政府が学問や芸術を振興してこなかったからです。昭和前期のように、政府が学問や芸術を弾圧したことだってありました。今回の新型コロナ問題に関してもそうです。ドイツと比較して言えば、ドイツ政府が、ローベルト・コッホ研究所やレオポルディーナ協会といった学術団体の勧告に従って政策を立案しているのに対して、日本政府は医者たちの専門家委員会の提言をあまり聞かないでしょう。今回の日本学術会議の新会員の非任命事件だってそうです。政府は学問を尊重していないのです。明治時代もそうでした。明治政府にとって大事だったのは富国強兵や殖産興業で、それに役立つ学問や芸術は要らないと政府の人たちは考えていました。

学問や芸術を大事にしないということは、心を大切にしないということです。ここでは詳しくお話できませんが、芸術ばかりではなく、学問もまた心で営むものです。頭がよくても心のともなわな

い人に決して学問はできません。インターネットの普及は、頭だけを大事にして心を大切にしないことの象徴のように感じられます。インターネットの普及によって、日本人の生のヴァイタリティは明らかに衰えてしまいました。人生というのは、苦しみと喜びです。誰でもみな、幸せに生きたいと思ひ、それだからこそ現在陥っている不幸を嘆きます。そうやって嘆いていたら思いがけず幸せが降って来て、それを嬉しいと思う。そういう喜びや悲しみ、楽しみや苦しみが延々と連鎖していくのが人生というものなのです。そこに生のヴァイタリティが生まれ、そのなかで学問も芸術も栄えます。ところがそういう喜びや悲しみ、楽しみや苦しみがインターネット社会のなかで希薄化してしまっています。そうすると文化などは生まれるはずがない、そう思われてなりません。

インターネットもグローバル化も必要程度は必要でしょう。しかし、いい加減、心を取り戻すことが必要です。小さなコミュニティに戻ることも必要です。われわれは足元から新しくやり直す必要があるんじゃないか、そう思っています。

西本：内田先生、どうぞ。

内田：ご質問いただき、ありがとうございます。フィルタリングと創発の役割を考えると、やはり人の文化が残っていくというプロセスは、人から人への「伝えたい」という思いがフィルタリング機能を担っていくのではないかと思います。いろいろなものがある中で「これを伝えたい」と思うものを人に伝え、発信し、それを皆が見て、応援することによって、恐らく残っていくのだと思います。

ただ、先ほど高橋先生が言われたように、今の時代は、選択肢があまりにも多くなり過ぎています。そのために、本来なら残ったものがむしろ拡散的になって残れないような現象もまた起きているのではないかと思います。そう考えると、今、残すべきものをどうきちんと残すかということをしつかりと考えるのであれば、勝手に人間同士のコミュニケーションだけに依存していたのでは、今のSNSの世の中でいう「バズればいい」という話になってしまいかねません。「バズる」というのはいろいろな人が「いい」と言って流行ることだと

と思いますが、それはやはり偏った選択になるので、そういう中で、本来的に守られてきたものを制度的に守ることが、実は今、重要になっているのではないかという気がします。

私がアメリカにいた時、「日本は大好きだ」と言われる人が周りに多かったのですが、「日本のどこが好きなのか」と訊いてみると、返ってくるのはトータルの答えでした。例えば、「食事が好きだ」とか「街並みがいい」とか一点を指して言う人はあまりなくて、全体的に平均値が高いという感じでトータルとしての満足度があるという印象を受けました。「食べ物も美味しいし、街並みも綺麗で安全だし、且つ芸術も特殊なものがあって、人が優しい」というような、包括的なパッケージとして日本の良さというものが評価されていると感じましたので、何かその有機的なつながりみたいなものを持つことが、実はこれからの日本の文化の発信という意味では重要なのではないかという気がしました。

西本：ありがとうございました。

Q3. オンラインの両義性、公共心の両義性においてどうバランスをとればよいか

参加者C：私は両面性、両義性に関心があるのですが、物事には必ず良い面と悪い面があると考えますと、大学の教育でも今はweb会議が進んでいて、確かに幅広く参加してもらおうという意味では良い面があると思う反面、そこから新しいものが生まれるのかどうかということに対しては、かなり疑問を持っています。

先ほど、スタンフォード大学に行かれたという話がありましたが、私の娘一家もその近くに住んでいまして、幼稚園に通う子どもがいますので、必ず父親が幼稚園に送り迎えをしています。それで、送って行って3時間ほどすると帰る時間になるのですが、見ていますと、幼稚園の傍にカフェがあって、父親は子どもを待つ間、そこで仕事をしています。

その光景と合わせて、なぜあの地域で新しい産業が生まれたのかと考えた時に、もしかすると異なる会社に勤める親たちが、子どもを幼稚園に送って行った後、同じカフェに居合わせて会話をする機会があり、その中から新しいものが生まれ

てきたのではないかと考えました。そういう面だけではないでしょうが、その要素もあるのではないかと思います。そうした時に全然会話をしないで、一方的にwebで授業をすることが本当に良いのか、悪い面はどうかと少し疑問を持っています。

それから、先ほど、日本人の特質として公共心が強いと言われましたが、それが端的に表れたのが、東日本大震災の時に、避難所で過ごしている人たちは、何の文句も言わずに、言われたことをきちんと聞いていました。それを日本のマスコミは「素晴らしい国民だ」と持ち上げたのですが、それを見て、私は間違っているのではないかと思います。つまり、きちんと文句を言わなければ、環境は改善しないからです。何も言わなければ、いつまで経っても避難所は世界から見て遅れた状況になってしまいます。これも両面性であり、公共心も大事ですが、それが行き過ぎると、何も文句を言わないために改善が進まないという状態になったのではないかと思います。この辺りのバランスをどう取るかは非常に難しいので、教えていただきたいと思います。

西本：コメントはいかがでしょうか。

高橋：文化は対話から生まれるという趣旨のご意見だと思いますが、その点をさらに明確にすると、文化は恋愛から生まれると言えると思います。恋愛においてラブレターを書くこと、これが文化の始まりです。ラブレターを書くには、まず字が綺麗でなければならない、文章が上手でなければならない、日本語に間違いがあってはならない。そこで言葉遣いに気を付けながら、美しい文体で、美しい字で書く。そうしたラブレターが奈良時代や平安時代の和歌でした。そこから文化、文学というものが生まれました。そして、もらったラブレターに返事を出し、対話をする。それが文学になりました。

そういう恋愛を今の若者はしていません。彼らはラブレターを書きません。むしろ短歌も作りません。電話やメールで、今度の日曜日に一緒に映画を観に行こうと言っても、それが和歌のような文化活動になることはできません。

今の若者は、ラブレターを書かないだけではなく、恋愛そのものもしていません。これでは文化

が生まれるはずがありません。三島由紀夫はインターネットの登場前に他界しましたが、彼の時代予測はおそろしいほど当たっています。

西本：熊谷先生、どうぞ。

熊谷：貴重なコメントをありがとうございます。両義性が大事だというのは、まさにその通りだと思います。先ほど地域の話がでましたが、地域によっては善悪の基準も変わります。したがって、「これが絶対の善だ」と押し付けてしまうと、閉鎖的な状況を生み出してしまいますので、やはり多様性も大事にしながら、選択肢もしっかりと確保していくことが大切だと思います。

そうした中で、マイノリティやニューカマーの人たちを大切にしていくなさだと思えます。私は仏教学を研究していますが、仏教は2500年ほどの伝統のある古い文化です。しかし、2500年前はその仏教もニューカマーで、荒唐無稽なことを言っていたのです。それでも、それが定着して、気がつけば古い文化になっているわけですから、やはりそういう芽が出て来た時に、周りが「これは悪だ」「マイノリティだ」と言って潰さないこと、寛容な状態を提供していくことは大切です。そういう意味でも、両義性という視点は大切だと思います。

西本：徳丸先生、どうぞ。

徳丸：両面性ということでは、日本の伝統音楽の場合、多くの人が「縦社会だ」と言い、一つの流派に所属していると「師匠の言うことを聞かなければならない」「上から真っ直ぐに力が下りてくる」と言い、「違う流派の人同士は一緒に演奏しない」と書いてある本もあります。それらは社会学者が書いていますが、真っ赤な嘘です。

つまり、縦社会に見える中でも、日本音楽の文化の中でも、師匠の言うことを聞かないで新しい流派を起こす人がいるわけです。例えば、一中節という様式があり、そこから豊後節が生まれ、さらに常磐津節・富本節・清元節が枝分かれしました。面白いことに、新しいものが生まれたからと言って、古いものがすぐに抹殺されるわけではなくて、縦の線がたくさん出てくるのです。そういう従順な部分と反抗する部分の両面性が、日本音

楽の中にはあるのではないかと、そう感じています。

また、山田流と生田流は箏曲の大きな流派ですが、私が公の演奏会を企画する時は、両方がやっている曲であれば、両方の演奏家を集めて演奏してもらいます。決して山田と生田だから別々に演奏してもらおうという発想はしません。また、優秀な音楽家なら、何派とやってもきちんとできます。そういう面も持っています。しかも、その上で自分の流派のやり方は守っています。話とは少しずれるかもしれませんが、そういうところが両面性の例ではないかと思っています。

西本：内田先生、どうぞ。

内田：シリコンバレーの話がありましたので、一言だけ述べさせていただくと、やはりアメリカの特にシリコンバレーの社会は流動性が高く、個人が個人同士のネットワークを通じて新しい創造性、クリエイティビティを次々に生み出しています。それで成功してきた社会だと思います。

しかし、そこにも両義性のようなものがあって、逆にそれが強くなってしまうと、個人として上手くソーシャルネットワークに乗れなかった人たちとの間に社会的な格差が生じ、その問題が今のアメリカの中では顕著になっていると思います。

したがって、どういうことにも両義的な側面があり、且つその流動的なコミュニケーションをベースにした社会を日本が上手く利用できているかという点、まだそれほど上手くは定着していないので、やはり、日本は場やコミュニティの中で何らかのアイデアを創発させる社会的な仕組みを長らく作ってきたのだらうと思います。

それも良い面と悪い面がそれぞれあると思いますが、本当にシリコンバレーのあの辺りの方々の働き方は日本の働き方とは違って、その中で受ける刺激はたくさんあったので、その良さを私は享受した部分もあります。ですから、日本に帰って来ると「堅い」「重い」と思うこともたくさんあります。それぞれの良い部分を考えて、模索していければ良いと思っています。ありがとうございました。

西本：まだ時間があるようですので、先ほど挙手された方、質問・コメントをどうぞよろしくお願ひします。

Q4. 万博を機に「けいはんな」で竹アートを制作することの意義をどう考えるか

参加者D：本日は素晴らしいお話をありがとうございました。

木津川市には地域型のアートイベント『木津川アート』という活動があります。

実は「けいはんなで万博を」ということで、地域レベル、市民レベルでいろいろと企画を練っているところですが、その中で竹を使ってアートを作ろうと考えています。竹の回復力から、様々な困難に対応していくという今の時代の背景を考えて、竹を使うことに意味があると考えて進めています。

人と人とのつながりを竹の輪で表現しようと、市民協働で制作することを考えていますが、このけいはんなの土地で日本の伝統文化の竹を使うことに意義について、先生方にご意見を伺いたいと思います。よろしくお願ひいたします。

西本：竹については、私たちの研究会でも採り上げまして、一年かけて議論しました。そういう背景もございますので、先生方、よろしくお願ひします。

徳丸：また音楽の話で恐縮ですが、竹は大きな可能性を持った材料です。日本で私がいつも紹介したいと思っているのが「竹筒琴(ちくとうきん)」です。大きな節を二つ残して竹を切り、表の皮を切れないように細く薄く剥いて弦の代わりにし、横の節のところを切り取って弦を張るための柱(じ)を作ります。フィリピンの人などは6枚くらい薄い弦を切り出して、音の高さを変えて両手で演奏します。それが恐らく、世界の箏の出発点ではなかったかと言われていて、実際に作ってみると、箏がどういうものかが分かります。

それから、長さの違う竹筒を作り、それを固い地面に落として合奏するもの(スタンピング・チューブ)もあります。また、竹にスリットを入れて打ち鳴らすとブンブンと音がしますが、そのように変わった音を出すためにも竹を使います。そ

ういう竹の楽器はアジアに大変多くあります。さらに、ブラジルにも竹はあります。

そのように竹の音楽的な可能性を使うと、これから新しい楽器を作ることも可能ではないかと思ひます。竹を有効に活用するということは、音楽においても有効に活用することを意味し、そこからの道ができてくるのではないかと思ひます。

先ほど申し上げたフィリピンのスタンピング・チューブは、私たちが1974年頃に日本で紹介したのですが、日本の小学校ですでに真似ている先生がおられるようです。そのように可能性が広がっていくと思ひます。

高橋：私は昔、ドイツのデュッセルドルフの町から遠くないメアブッシュというところに住んでいました。デュッセルドルフはロンドンと並び、ヨーロッパで日本人が一番多く住んでいるところでは、それら日本人グループの協力を得て、デュッセルドルフの駅の構内に2~3ヶ月のあいだ竹が展示されていることがありました。ある日、デュッセルドルフ駅で電車を降り、構内に竹を見つけ、こんなところに竹があるのか、なつかしいと思ひてしばらく眺めていたところ、一人のドイツ人が近づいてきて、彼に、これはあなたの国のものだろう、あなたの国ではこういうものがそこらに普通に生えているのかと聞かれました。当時、日本での私の家は京都の八幡市にあったので、東京にはあまりないが、うちの近所にはたくさんあると答えました。そのとき、そのドイツ人としばらく話しました。彼はわれわれヨーロッパ人に、竹というのはとても神秘的に見えるんだと語っていました。

竹は神秘的だと言われたことを時々思ひ出します。まさに竹には特別な精神性がこもっているように感じられます。竹を割ったような性格とは、意地悪や邪悪なことを一切しない、信頼できる良い人という意味です。つまり、竹というのは単純な形をしているけれども、精神性を有している、シンプルだけれどもとても高貴なのです。

竹にはヨーロッパやアメリカの樹木にはない特徴があります。このすぐれた特徴を引き出してくれる人がいないだろうかと思ひます。隈研吾氏が中国で竹のホテルをつくっています。彼はそういう要望に応じてくれた人のひとりです。

高校生の頃、川端康成の『竹取物語』の現代語

訳を読んだことがあります。川端康成はそれに長い注釈を付けて、竹の精神的な意味を説いています。竹のアートでそうした竹の精神性をぜひ引き出していただきたいと期待しています。

熊谷：私はアートのことは分からないので、仏教哲学的な視点で回答させていただきますが、実は私が研究しているブータンにも竹文化があり、様々な竹の工芸品があります。また足場が竹で作られているので非常に危ないと思うのですが、崩れたところは見たことはありません。様々なところに竹を用いるブータンは、竹に親和性のある国だと思っています。

先ほどお話がありましたように、様々な国に竹文化がありますので、そうした国の方々とインターネット等を通じて交流していくことは悪くないアイデアだと思います。仏教では、方便と知恵の両方の統合が大事だと言っていますが、例えば、竹で作る技術や材料を方便、メソッドやマテリアルとすると。また、作り手にはコンセプト、フィロソフィーがあって、そのフィロソフィーは土地ごとに違うと思いますので、先ほど精神性という話がありましたが、技術の交換だけではなく、知恵の交換もしていけば、そこから新たな発想が生まれてくるのではないかと思います。専門外からの意見で申し訳ありません。

徳丸：もう少し追加すると、食べ物や飲み物とも竹は関係します。宮崎県では「かっぽ酒」という、竹の中に日本酒や 20 度程度の焼酎を入れて直火で温めるものがあります。それを切ってきたばかりの竹の猪口で飲むのですが、身体に良いと言われています。

それから、私が調査しているベトナムの少数民族は、竹にもち米を入れて炊き、炊き上がると竹を割って中の米を食べます。これも「身体に良いから食べなさい」と村の長からよく言われます。

もちろん、日本のいろいろな地域にも筍や竹の皮を使う料理がありますが、もっと抜本的に考えても面白い問題が出てくるのではないのでしょうか。それを申し上げたくてお話ししました。

西本：どうもありがとうございました。

●まとめ

西本：予定していました時間が参りました。私が所属しています京都市産業技術研究所は、先進技術だけではなく、伝統工芸分野に対する支援もしています。

そういう立場から、伝統的な文化に根差したもののづくりを眺めてみますと、日本の国民性でしょうか、まず新しいものを何の先入観もなしに取り入れるという受容力が備わっています。そして、受容したものを何かと置き換えて元のものを排除するかというと、そうではなくて、新しいものを次々に取り入れて置いておく、つまり多様化していくわけです。

そのなかである時、気が向けばそれらを模倣して自分なりに作ってみる。当然のことながら、入って来たのは製品だけですから、原料が全部揃っているわけではありません。そこで、揃っていない原料はまた別のところから持ってきて、新たな形を創っていきます。

最初に受容があって、次に模倣の期間がある。そして、模倣の後に変容、すなわち受容したものは異なる変化が起こります。そして、やがてそれが 300 年周期と言っていますが、それくらい経ちますと、似て非なるものに仕上がっていくわけです。

その一つの例として、象嵌細工があります。発祥の地はシリアのダマスカスの辺りですので、これを英語で「Damascening」と言います。それがシルクロードを伝って日本にやってきたわけです。実はその当時のシリアには、酸やアルカリ等、今で言ういろいろな化学薬品が材料として整っていたのですが、日本にはそんな薬品としての酸やアルカリはありませんでした。象嵌は、鉄を刻んでそこに金を嵌め込み、鉄の部分をアルカリ、あるいは酸で錆びさせるのが一つの手法です。しかし、日本ではそのように薬品で錆びさせることができないので、何をしたかということ、黒い漆を塗りました。そうすると、天然の樹脂である漆はツルツルしていて光るので、黒光りする象嵌細工ができたわけです。

これは一つの新しく変容した姿ですが、もっと本物に似せたいと思い、漆を焼き焦がして表面を黒い粒々にしました。そのように、いろいろな手法を使って本物に似せようとするのですが、やが

て似て非なるものが出来上がっていったのです。一方、象嵌細工の Damascening はサラセン帝国の時代にスペインのトレド地方に伝わっていましたが、やがて宣教師を通じてスペインにもたらされた日本の象嵌細工と邂逅します。そのように、歴史をたどると面白いことが起こっています。

そう考えますと、約 200 万年前に生まれた人類（ヒト属）が進化し続け、約 25 万年前に現世人類の祖先に当たるクロマニヨン人が出現してから、これまで幾世代にも亘って繰り返された人間の歴史には計り知れないものがありますが、少なくとも人間は文化を次の世代へと繋いでいく存在であるという事実が重要です。このけいはんなのコミュニティは高々 30 年くらいの歴史ですが、今ここで形成されたコミュニティから新しい文化を生み出そうという力が生まれていることを評価したいと思います。これが世代を越えて繋がっていきますと、やがてけいはんなから生まれた文化が根付いていくと確信しています。その最初のショールームとして、関西万博の機会を捉えて「我々はこんなことをしています」というものを発信すればよいのではないかと、そのように思います。

そういう意味では、今回、新型コロナウイルスの感染拡大の結果、私たちは少し立ち止まって、人類が持っている文化なり、そういう価値のある、大事にしたいものについて、じっくりと考える機会を得たのではないかと思います。長い歴史の一コマとして、こういう期間が恐らく 2~3 年は続くのではないかと思われますが、その後に新たな文化が芽生えてくることに期待を持つという、それこそは人類が次々と世代を越えて伝えていこうとするモチベーションにもなると思います。そういうことを感じさせられたこの公開討論会で

した。どうもありがとうございました。
それでは事務局にお返しいたします。

大槻：以上をもちまして、国際高等研究所「日本文化創出を考える」研究会パネルセッション『世界に発信する日本の文化力 — ニューノーマル時代の基盤構築に向けて —』を終了いたします。

ご参加の皆様におかれましては、長時間にわたりお付き合いただき、ありがとうございました。

ご登壇された先生方に拍手をお願いいたします。

西本：どうも、ご協力ありがとうございました。

大槻：先生方、ありがとうございました。

当研究会では、けいはんな学研都市の立地機関の皆様と文化活用力について検討していくことを目的の一つにしております。今回のように公開の場での議論や質疑応答を通して新たな発想を吸収するとともに、研究会へのオブザーバーの参加の機会も設けております。ご希望がございましたら、国際高等研究所までご連絡いただきますようお願いいたします。

最後となりますが、皆様にお配りしておりますアンケートにご記入をお願いいたします。会場の外の受付け付近に回収ボックスを設置しておりますので、恐れ入りますが、ご記入いただきましたアンケートをお持ちいただきますようお願いいたします。

本日は、ご参加いただき、誠にありがとうございました。それでは、皆様、どうぞお気を付けてお帰りくださいませ。

研究会開催経過

第1回

日時： 2020年7月17日（金） 13：30～16：30
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： 2020年度の研究会の進め方についての議論

第2回

日時： 2020年9月4日（金） 13：30～16：30
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： 京都スマートシティエキスポでの公開討論のテーマの検討
文化庁移転に伴う京都や文化庁との連携の検討
大阪・関西万博への取り組みについての議論

第3回

日時： 2020年10月28日（水） 11：30～14：30
場所： けいはんなプラザ 3階ナイルおよび5階テムズ
内容： スマートシティ EXPO会場における公開パネルディスカッション
「世界に発信する日本の文化力
～ニューノーマル時代の基盤構築に向けて～」

第4回

日時： 2020年12月15日（水） 13：30～16：30
場所： 京都高度技術研究所 2階研修室
内容： スマートシティエキスポでの公開討論を踏まえた今年度の議論の整理
今年度報告書の構成についての検討

第5回

日時： 2021年2月19日～3月5日
場所： メールでの審議
内容： 今年度報告書について議論

※新型コロナウイルス感染拡大の影響により、第5回研究会はメール交信によって議論した。

研究会メンバー

代表者

西本 清一 (公財)京都高度技術研究所理事長、(地独)京都市産業技術研究所理事長、
京都大学名誉教授

内田由紀子 京都大学こころの未来研究センター教授

熊谷 誠慈 京都大学こころの未来研究センター准教授

高橋 義人 平安女学院大学特任教授、京都大学名誉教授

徳丸 吉彦 聖徳大学教授、お茶の水女子大学名誉教授

長尾 真 国際高等研究所学術参与、京都大学名誉教授

事務局 (国際高等研究所)

中西 博昭、草野 忍、大槻かほる

「日本文化創出を考える」研究会

2021年3月

公益財団法人国際高等研究所

〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地

TEL : 0774-73-4000 FAX : 0774-73-4005

<http://www.iias.or.jp/>



〒619-0225 京都府木津川市木津川台9丁目3番地
TEL:0774-73-4000 FAX:0774-73-4005 <http://www.ias.or.jp/>